

---

# 二人の誓い

SRNEKO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

二人の誓い

### 【Nコード】

N3281C

### 【作者名】

SRNEKO

### 【あらすじ】

多発する自殺者。しかしこの町での自殺者には、他にはない共通点があった。彼らは皆、どこかで誰かが自殺する現場を見ているのだ。そしてそれは、主人公の通う学校でも起きた。自殺する現場を見た新聞部の部長は、主人公の隣人でありクラスメート。その新聞部は、母校での自殺者が出たことを切っ掛けに、この地域一帯で連続する自殺についての調査を始める。そして彼らの調査の行き着いた先には、人ならざる者の意思があった。

## プロローグ

青く澄んだ空間に、僕は漂っている。水に浮いてるようなのに、濡れてはいない。

だがこの状態に驚くことはない。僕は幾度となくこれを体験している。ただ全体に青が広がる空間。ここに来たのは二日ぶりだ。

ここがどこで、何のための場所なのかは大凡の見当はついている。ここは僕の夢の中で、嫌な思いを忘れさせてくれるのだ。しかし完全に忘れることはない。そのときの話をされれば思い出す。たぶんまだ完全ではなく、いずれ何があっても思い出さないようになる。何となくではあるが、そんな気がするのだ。

だから安心して目を瞑る。次に目覚めたときには嫌なことを忘れ、爽やかな朝を迎えることができる。

そうだ。これから毎日、自分にとって嫌なことをしよう。例えば自傷行為なんかどうだろう。

いや、それでは傷跡を見て思い出してしまう。では他に考えなければ。

自分が嫌な思いをして、しかし後に何も残りほしくないこと。

ああ、一つあるじゃないか。誰からも気付かされないことが。他の誰もが知っても、僕だけは気付き得ない方法。

翌日、僕は学校の屋上に向かった。まだ誰も来ていない。誰も僕に気付いていない。

誰にも気付かれないうちにと、飛び降り防止用のフェンスをよじ登り、反対側の狭い足場に降りる。

地上五階。もしかしたらこの高さでは目的を果たせないかも知れない。だがここじゃないといけない。

ここが始まりなんだ。いや、すでに始まっている。僕は六人目だ。ふと、学校の校門を一人の女子生徒が通った。

一人しかいない。だが、これからも数は増えるのだ。もっと多くの人間が救われるためにも、一步を踏み出す。

全身で空気を感じられる。まるで僕に羽が生え、墜落する寸前には飛べるのではと錯覚した。だがそれはない。それにここで飛べば、僕は救われない。僕は僕のために。そしていろんなことに苦しむ人たちのために。

女子生徒が僕に気付いた。頭から落ちる僕に。

彼女の顔は、一瞬にして驚愕、そして恐怖の表情へと変わった。

彼女が悲鳴をあげると、僕が赤煉瓦の花壇の角に頭から落ちたのはほぼ同時だった。

## 第一章 夢

—

まだ八月に入ったばかり。夏休みと言う名の長期休暇もまだまだある。

正直俺は、夏休みが好きではない。まず今では大半の高校に冷暖房が完備されているというのに、何故このような長い休みを用意するのだろうか。

そして何故この夏休みの中で夏期講習を設けるのか。こんな自主参加のものがあるから、同じ学年の中で大きな学力の差が生じるのではないだろうか。

こんな不公平なものが好きであるという人間の気持ちなど理解できない。

しかし、すっかり欠かさず夏期講習に参加している俺がそんなことを言ったところで説得力がないので、一度だって口にしたことはない。

別に周りに遅れを取るのが嫌だから、わざわざ白いチョークで黒板に書かれた字や、補足などをノートに書き写すわけではない。

俺は一学期の半分近くをサボタージュしてしまい、強制的に参加を余儀なくされてしまったのだ。何故半分近くも行かなかったのかそれは別に大した理由ではなく、ただ学校に行くのがダルいと感じていたからだ。

これまで小学校、中学校と、目立った休みがなかった分、俺の行動は目立っていた。何せ、病欠すると連絡して、近くのコンビニに買い物に出ただけでサボっただろと言われるくらいだ。

だから一学期の後半は休むことなく通ったのだが、終業式間近になって、担任からこのままだと出席日数が足りなくて進級出来ないと脅された。

しかし夏期講習などに出席していれば、なんとかなるかも知れないというのだ。俺はそれを真に受け、今に至るといわけだ。

だが、一学期の前半は前学年の復習がメインで、俺は大して遅れを取っていない。そもそも、休んでいる間に二年生で習う内容の半分以上は頭に入っている。その上、一昨年の冬に隣に引っ越してきた家族の一人が俺と同じ学校に通っていて、俺が休むと必ずノートを持ってきてくれていた。

その彼女も、この夏期講習を受けている。席も隣だ。しかし何故彼女は夏期講習を受けているのだろうか。彼女は一日たりとも休んでおらず、成績も学年順位で上位に位置している。そんな彼女が参加している理由はなんだろうか。

「相馬くん、授業終わったよ」

俺の名前を呼ぶ声のするほうを見ると、先ほどの話の少女、神崎愛美の人差し指が俺の左頬に触れた。

「ふふ、引っかった」

「お前、ホントやるのがガキっぽいぞ」

今の俺の言葉で、満面の笑みで喜んでいたのが一変し、両頬を膨らませ、あからさまに不機嫌な顔になった。

「な、なによ。子ども心を忘れまいとする私をバカにするの?」

「おい、それだとお前が不機嫌になるのは間違いだろ? ガキっぽいと言われたら喜ぶべきだぜ」

「へ、減らず口!」

そう言っただけで先に帰ろうとする彼女の手を、俺は無意識のうちに握っていた。

当然彼女は驚いた顔でこちらを見ている。

「どうせ隣なんだから、先に帰ってもしょうがないだろ」

とつさにそう言っていた。こんなこと、言っただけなのに。

「なんで?」

俯いて、彼女は呟いた。

「なんで相馬くんは、そんなこと言うの?」

「……悪い。こんなこと言うつもりはなかった。」

言いかけて、窓の外を何か大きなものが落ちたのを見た。鳥なんかよりも大きな、飛んでいるわけでもなく、ただ落ちている。

窓の側に行き、鍵を開けていると隣に神崎が寄ってきた。

「どうしたの？」

窓に背を向けていた神崎にはわからなかったのだ。先ほど落ちたのは、人だ。

窓を開けて下の校庭を覗いた神崎が、大きな悲鳴をあげた。

## 二

屋上から飛び降りたのは、一年生の男子生徒。死因は頭を強く地面にぶつけたことによる脳内出血。と言われるものだと思っていたのだが、落ちる際に怖さの余り、ショック死してしまったということとだそうだ。

地上六階建ての屋上から落ちたというのに、目立った外傷はほとんどなく、検死を行った人も驚いていたらしい。

そして彼は入学当初から虐めの対象になっていたらしい。それも、担任の教師が率先してそれを行っていたというのだ。親や警察にいうようなら、殺すなどと脅され続け、今日という日を迎えてしまった。

当然、その担任の教師は懲戒免職処分とされ、他にも男子生徒四人が退学処分となった。

しかし自殺した男子生徒は、遺書などを残していなかった。自宅の自室や、彼のクラスの教室、家族や友達の思い当たる場所を探しつくしたが、結局見つかることはなかった。

というのが二日前、俺と神崎が見た自殺の実態だった。

「こんなものでいいか？」

夏休みというのに俺は報道部の活動を手伝っていた。

一週間に一度、夏休みだろうが何だろうが構わず活動する新聞部。主な活動内容は学校で起きた様々なことを小冊子やプリントにして配るといふもの。

夏休みは人がこないなので配らないが、始業式になると一カ月分を増刊号と称して配布する。

こういうものはあまり読まずに捨てられるものだと思っていたのだが、編集者である部長の腕が良いのか、全校生徒のほとんどが毎週これを楽しみにしている。

ちなみに部長は神崎。現在三年生の部員がないから、ということらしい。そして俺は、こないだのことを許して欲しければ手伝うようにと脅されていた。

「うん、ありがと。これで今週分は大丈夫そうね」

俺が調べたメモを受け取ると、彼女は笑みを浮かべた。

「でも明日は学校入れないだろ。てか夏休み中はもう入れないかもしれないぞ」

「まあ、そしたら図書館かしらね。幸い部員はみんな図書館の近くに住んでるし」

「そう、か」

うん、と楽しそうに笑う彼女を見て、俺はどうしても謝らなくてはいけないと思い、しかし踏みとどまった。あのときのことを、こんなことだけで許してもらっていいわけがない。

俺の彼女に対しての罪は、こんなに軽いものじゃない。謝って許してもらえないようなものでもない。俺は一生を掛けてでも償わなくてはならないのだ。たとえ彼女がそれを望まなくとも。俺にはそれしかできないから。

「どうしたのよ」

ぼーっとしていた俺の目の前にいつの間にか神崎の顔があった。

驚きはしたが、それを何とか表に出さずに済んだ。

「いや、なんでもない」

「嘘。絶対に何か隠してそうなんだけど」



「本当に何でもないんだよ」

「ならいいけど、私に隠し事するのは、できる限りしないでね」

念を押すように言われ、俺は無言で頷いた。だが、もともと隠し事などするつもりはない。少なくとも、彼女が知るべきことは、絶対に。

「それにしても、最近多いよね。自殺」

「ん？ そうなのか？」

このところまともにテレビや新聞を見ていない俺にはさっぱりだ。自殺者が増えている。まあ、そんなことは聞いたことはあるが、また最近増えたとも言っただろうか。

「あれ、知らないの？ ここ最近、この区の学校だけで二十人以上が自殺してるんだよ。って、学校サボってた人にはわからないか」

このあたりの学校だけで二十人を超える自殺者。つまりほとんどが学生だろう。しかしいくら自殺者が増えているからと言って、さすがにこれは多すぎやしないだろうか。

「まあとにかく今日はありがとね。それにしても自分から手伝ってくれるなんて、珍しいこともあるものね」

「は？」

思わずそう口にしていた。神崎は忘れていたのだろうか。俺が一昨日言ってしまった言葉を。そしてそれを許す代わりに手伝えと脅してきたことを

「何よ」

毅然とした態度で、まるで自分がなにも忘れていないとでも言うように聞き返してきた。だから俺も彼女の間違いを指摘する気が失せてしまった。

「い、いや、なんでもない。ただ、これから俺の部屋に勝手に来るのだけはやめてくれないか？」

「なんで？ 家だって隣なんだし、窓から侵入しても大丈夫なんじゃない？ ……あれ、私何か忘れてないかな」

やはり忘れてる。だが、なんとなくは覚えているらしい。なら

ば思い出させたほうがいいのだろうか。……とりあえずはもう少し様子を見ることにしよう。何か、何かがおかしいから。

「じゃあ、もう帰るね」

そう言って、彼女は俺の部屋を出て行った。

外はもう暗くなり、外に見えるのは街灯と雲の上にある月の明かりだけだ。そのほかには何も無い。私は、なんでそう思うのだろうか。何か忘れていている気がする。とても大事なことを。そう思ったのは相馬さんの部屋で、自分で言った言葉が頭の隅っこに引っ掛かってしまっているからだ。

“家だって隣”

ああ、そういうことか。思い出した。男子生徒が自殺した日、相馬さんが私に言った言葉じゃないの。

このことで私が落ち込んで、彼が何でもするから許してくれと言って、私は彼に今回の自殺者のことを調べてくれたら許すと言ったのだ。

何故私は忘れていたのだろうか。確か昨日の夜、寝る前までは覚えていたはずだ。

それで、眠りについた私は、そうだ、私は夢を見たんだ。

青く澄んだ空間。私は水に浮いているはずなのに濡れてはいなかった。しかしその不思議な光景はどこか懐かしく感じられた。初めて見たはずなのにそう感じるのは何故だろう。

ずっとぶかぶかと浮いているのが心地よくて、嫌なことなんて全部忘れてしまいそうで、そう思っていたら綺麗な女の人が現れたんだ。

「私は貴方の苦しみを、取り除く者。貴方が口にしなくとも、私が貴方を救います」

そして私は目覚めたのだ。夢の中に、あの記憶を置き去りにしたまま。

何か。何か得体の知れないものが私の中に？

そう思った瞬間、体中に寒気が走った。身体が震え上がり、床に尻餅をついてしまった。

私の中に何かがある。そしてそれは、私の嫌な思い出を忘れさせている。もしこのままこんなことが続いてしまったら、私は相馬くんとの出会いを、大切な思い出を忘れてしまうかも知れない。

今回のように、思い出すきっかけなど皆無に等しいあのときのことを。

## 第二章 過去と感染

### 第二章 過去と感染

—

神崎からのメールに起こされ、俺はそれを迷惑だと思いながらも起き上がった。そして窓際まで行くとカーテンを開いた。

すると彼女が微笑みながらこちらに向けて手を振った。向こうはすでにベランダに立っていて、こちらもそうするようにと指示された。暗い夜、月明かりの下で密談とは、なんとも怪しいなと思いつながらもそれに従う。

「で、なんだ？」

「うーん、そうね。大した用じゃないんだけど、ちょっとしたお願いがあるの」

満面の笑みをその美しい顔に浮かべ、何の迷いもなく答えた。それはまるでどこぞのお嬢様のような身勝手さに見えなくもないが、俺は彼女のためにならなくてもすると決めただけで、特にこの行動に腹を立てることはない。むしろ頼ってもらえていることに喜んでいるといつてもいい。

「大した用じゃないのにこんな夜中に起こしたんだな？ よし。その大した用じゃない用というものを聞かせてもらおうか」

「うう、なんか負けた気分……。と、とりあえず率直に言うけど、私が寝てる間、傍で見ているもらえない、かな？」

俺は自分の耳を疑った。だから、は？ と小さく声をあげてしまった。しかし彼女はこれを、聞こえなかったものだと勘違いして、口を開いた。

「あの、さ。これ何回も言うの耻しいんだからね。朝まで私の側にいて欲しいの」

最後は消え入りそうな声。それだけ恥しいのだろう。それは当然だ。頼まれた俺だつて恥しい。顔が熱くなるのを感じるほどに。

「な、何でだ？」

「ちよつと、私のこと見ていて欲しいの。もしも、何かあつたら起こしてくればそれでいいからさ」

こんなことを頼む意図が掴めない。彼女はいったい何を言っているだろうか。そういえば昼間も俺との約束を忘れていた。それどころか、俺が先日言ってしまった言葉すら忘れていた。もしかしたらこの頼み事は受けたほうがいいのかももしれない。それが彼女のためになるのなら。それに、彼女からの頼みは断りたくない。

「わかつたよ。けど、俺も朝まで起きていられる自身はないぞ？」

「うん、いいよ。たぶん、相馬くんなら私に何かあつたらすぐ気付けると思うから」

それは俺のことを信頼しているからなのか。それとも、彼女だけが信じる俺の内なる者の存在に対して言っているのだろうか。

少なくとも今は、彼女の傍で朝まで過ごすことだけに専念しよう。そう思つて俺は、ベランダの手摺に上り、彼女の傍に跳んだ。

ピンク色のカーテンや可愛らしい熊や豚の縫い包みがあるのを見ると、やはりここは女の子の部屋なのだと自覚する。ここに来るのは初めてではないが、何度来ても居心地はあまり良くない。

携帯のサブディスプレイの明かりを点けて時間を確認する。午前三時を少し過ぎたところ、か。

神崎のところに来てから二時間が過ぎようとしている。自分の部屋に男がいるというのに、平気で寝ていられる彼女の神経はどうかしているのではと心配になるが、それだけ俺を信用しているんだということにしておいた。そうでもしなければ、俺は男としての自信を失つてしまいそうだから。

しかし寝ている彼女を見てみると退屈しない。寝言で何やら言っているのをじっくり聞いたり、いきなり寝返りを打つのに驚かされ

たり、その寝返りで彼女の手が俺の頭を直撃したり、とても楽しい。ただ、ピンクの水玉模様のパジャマ姿が刺激的すぎなのが問題ある。俺はこのまま正常でいられるのだろうか。それはいろんな意味でとりあえずは眠気はない。まあ、一度寝ていたおかげだろう。

ふと、彼女に小さな動きがあった。真っ直ぐに上を向き、小さく口を開いている。それ自体に大した意味はないのだろう。しかし彼女の身体の上に、黒い靄が現れた。それはこの真っ暗な部屋でもわかるほどの黒さ。それは純粹な黒。漆黒。気持ち悪い。これをずっと見ていたら自分を失ってしまいそうだ。これは一体、何だ？

良く見ると、彼女の口内から少しずつだがそれが出てきている。そして靄は大きくなっていき、同時に何かの形になろうとしていた。靄はもつと多くの質量をもつものになり、次第に人の形へと近づいていった。漆黒の長い髪。細く真っ白な肢体。一糸纏わぬそれは、幼さの残る顔をした少女の形となった。

俺はその少女を前に恐怖を覚えた。まだ目は閉じられているのに、彼女に見られているような気がする。彼女はいつたい、何者だ？

俺が身動き一つできないでいると、少女は目をうつすらと開き、小さな瞳は俺を見ている。

「貴方は……何者？」

少女は俺にそう問いかけた。口を開いていないのに、声が聞こえてくる。テレパシーなどの類のように頭に直接語りかけてくるのではない。この部屋に彼女の声が響いているのだ。

「貴方は、何者？」

俺が無言でいたためか、彼女はもう一度問うてきた。

「俺は、相馬慎治、だ」

「相馬、慎治。貴方の苦しみ。それを私が忘れさせて差し上げます」  
そう言っただけで彼女は俺の前に降り立ち、優しく微笑んだ。漆黒の瞳。その瞳に、俺の中の何かが吸われそうになる。

彼女は俺の苦しみを忘れさせてくれるという。つまり、苦しい想いをした記憶を、彼女は吸い取ってくれているのではないだろうか。

それでは昨日、神崎が先日のあの言葉や約束を忘れていたのも彼女の所為か。

嫌な想いをした本人だけが記憶を失い、しかしそれを知っている他の者は覚えているというのか。それは、嫌だ。俺はどの記憶も失いたくない。例え思い出せないほどの些細な記憶だって、それを失ってしまったら俺ではなくなってしまう。

俺が俺でなくなるのは、死ぬ時だけでいい。

だから、

「止める！」

低い声で、そう叫んだ。

すると少女の身体から黒い何かが漏れ始める。それを見ていた俺は次第に意識が遠のき、その場で倒れてしまった。

二

身体が妙に重い。まるで何かが私の上に横たわっているように感じる。きつとこれのせいで目覚めてしまったのだろう。いったい、何があったのか。

目を開けて、特に重さを感じる胸のあたりに視線を向けた。するとそこに、黒い膨らみのようなものが見えた。まだはつきりしない視界の中、わかったのはそれだけ。しかしそれは、ピンク色のパジヤマとの間に見えるだけで不気味なものを感じる。

恐る恐るそれに手を伸ばし、触れてみる。するとそれが、人の髪の毛のような感触だということに気付いた。そういえば、相馬くんが一緒にいるはずだ。

「相馬くん？」

彼がいるのを確かめるように呼びかけた。だが返事がない。やはり胸の上にいるのは、彼なのだろうか。私は彼を信じていたから傍にいてくれるよう頼んだというのに、彼には私の想いなど届きはしなかったのだろう。だからただ寝るだけでなく、こうやって私の上

で寝ているのだ。

はつきりしてきた視界の中、胸の上にいるのが相馬くんであることがわかった。私がここで大声をあげたらどうなるだろう。もう一度と彼は、私の近くに来ることはなくなってしまうかもしれない。こんなことをされても、彼が傍から離れてしまうのだけは嫌だ。どんなに酷いことを言われても、私にはこの人がいなくてはいけない。彼がいなければ、今の私だっていない。それに、彼は私に酷いことをしても、それをちゃんと認めて、謝ってくれる。一生懸命に、頭を下げて。時には何でもするからと、泣きそうな顔で。そしてその時にした約束は、必ず守ってくれる。

彼は、とても優しい人なんだと思う。それなのに、学校の間には彼とあまり関わろうとしない。誰も彼のことを信じない。たぶんそれは、私を助けてくれた力が原因なのだろう。それを誰もが気味悪く思い、彼に近寄らなくなった。きつとそういうことだろう。私だって、もしかしたら、ううん、そんなことはない。私は彼を拒絶したりしない。たとえどんなことがあっても、私は。私だけは絶対に。

「私は、貴方の味方でいても、いいよね？」

私は今、笑顔で言えただろうか。相手は寝ているのに、この言葉を言うだけでどこか恥しい気持ちでいっぱいになる。でも、この気持ちは悪くない。彼が私を見ていてくれるから、私もそれに応えたい。否、そうじゃない。私は彼に見ていてもらえなくても、彼の味方であるだろう。

私は、彼のことが好きなのだから。

しかしこの想いを告げるときなんてこないかもしれない。彼が私の傍に居るのは、私のことを好きだからではない。私の家族が危険に晒され、彼が助けに来てくれたことがあった。そのとき彼は、私の家族を救えなかった。母も父も、そして兄も。彼が悪いわけじゃないのに、それでも彼は責任を感じて、私のことだけは何かあっても絶対に護ると誓ってくれた。そんなこと、しなくてもいいと何度



も言ったのに、それでは駄目なのだと、凄まじくしまった。最初は仕方なく傍にいてもらったが、一緒にいるうちに私は彼に惹かれていった。どんなに恐ろしい力をその身に秘めていたって、そんなことは関係ない。

けれど彼がそれに気付いてくれる気がしない。彼は私を護ることを自分の使命とし、他のことに関してはほとんど無関心なのだ。きつと彼自身、そのことにも気付いていないかもしれない。もしそうだったら、教えてあげなくては。

そう思いながら、彼の頭をそつと私の隣に退けて、タオルケットをかけてやった。

時計を見ればまだ午前四時三十分を過ぎたばかりだ。今回はあの夢も見なかったことだし、もう一度寝よう。そして、目覚めたときにまだ彼がいれば、一緒に一日過ごさないと訊ねてみよう。

「おやすみ」

私はまた、深い眠りの中に落ちていった。

### 三

俺は何か間違いを犯してはいないだろうか。彼女に疚しいことをしてはいないだろうか。たとえ気を失っていたからといって、そんなことをしていたらどうしよう。俺は彼女を護るべき人間で、襲う側ではない。どんな意味でも、だ。

だが俺は彼女の隣にいて、彼女は俺の腕を抱いている。何だ？

いったい何があった？ いかん、頭が混乱して何も思い浮かばない。彼女を起こす？ それが一番いい気がする。俺が起こしてやればまだ言い訳もしやすい、かもしれない。

「か、神崎？」

熟睡して一声かけたぐらいでは起きないだろうと思っていたのが間違이었다。彼女は俺の声に反応して、そつと目を開けた。

「ん？ おはよう相馬くん」

「あ、あの、さ、もう昼前みたいなんだけど、図書館には行かないのか？」

わずかな沈黙。神崎は机の上に置いてある小さめの時計に目をやり、顔を青褪させた。

「なあ、大丈夫なのか？」

「うーん、ちよつと危ないかも。ていうか、遅刻？ 相馬、くん、ちよつと悪いけど、帰ってもらえるかな」

必死に平静を保っているが、明らかに動揺している。もしかしたら彼女はこのことを忘れていたのかもしれない。そして起きたら俺と一緒にいるつもりだったとか考えていたり……否、それはないな。ともかく俺は帰るようにと言われたのだから、その通りにしよう。だが、帰る前に一度確認しておきたいことがある。聞くのも怖いけど、それでも聞かないで帰るとそれを引き摺ってしまいそうでもつといやだ。

「えつと、俺、お前に変なことしていないよな？」

「え？」

彼女は俺から視線を外し、作り笑いを浮かべる。

「う、うん、何もしてないよ。それより私が寝てる間、何かあった？」

あからさまに俺が何かしたような言い方をしている。それでいて問い詰めさせないように、逆に問いかけてきた。

「ああ、一応あったけど、それはお前が帰ってきてから話すよ。それでいいよな？」

小さくうなづく彼女を見て、俺は窓から出て行った。

自室に戻ったあと、冷静にあの女のことを考える。彼女から感じたものは、黒と白。あれは両方を兼ね備えていた。それも今までに見たことのないようなもの。そうだ。俺はもう何も見えなくなっていたはずなのに、その俺にでも彼女の姿が見えた。もしかしたら、本体はもつと別の姿をしていたかもしれない。だが何もわからない。「思い出した」

不意に、頭上から声が落ちてきた。見上げるとそこには、あの少女の顔があった。驚きのあまりに小さな悲鳴をあげてしまったが、今の彼女からは禍々しさを全く感じられない。あるときとは全く違う雰囲気を持つ彼女は、俺に向けて笑みを浮かべた。

「貴方、私のことを覚えていないのかしら？」

「覚えているも何も、神崎の部屋で会ったことしか」

「そんなのは当たり前でしょう。私は貴方のことを思い出せたというのに、貴方はまだ思い出せないの？ 私たちが会ったのは、あの娘が家族を失った日、だよ」

#### 四

神崎愛美。

彼女が引越してきた一昨年。俺のところに、彼女が挨拶をしにやってきた。そしてまるで女神のような美しい笑顔で、初めまして、と。そして自分の名前を言った。一瞬だが、この子は人間なのだろうか、本気で悩んでしまった。少し前まで見えていた異形のもの類なのではないだろうか。そんなことを、ほんの僅かにだか思っていた。

だがそれはありえないと、自分で分かっていた。もう見えないものを、また見えるようになるなんてことがあるわけがない。だから余計に話し辛く、彼女の顔もまともに見ることができなかった。そんな俺に気付かないのか、彼女は笑いかけ、

「同じ年だよ？ 学校も一緒だといいいね」

と言っていた。

翌日、彼女は同じ学校に通うということ伝えてくれた。正直、嬉しかった。俺は女子生徒との関わりはあまり持っていないが、それなのにこんなに綺麗な子と一緒に学校に通えるとなると、喜ばずにはいらなかった。だが、彼女の前ではそれを表に出さぬよう、細心の注意を払うことを心に誓った。

そのまま二ヶ月が経ち、卒業まであと僅かとなった。俺と神崎は、できるだけ近くの高校に揃って受験し、共に合格。一緒に喜び、教科書等の販売会、入学前の説明会なども一緒に行った。

いつの間にか俺たちは親しくなり、まるで幼馴染のように錯覚することもある。いつも一緒にいるのが当たり前のような俺達。本当に付き合っているようなそんな気分にも陥った。家族ぐるみでの外出などもある。夜になればお互いの部屋のベランダに出て、高校生活と一緒に楽しく過ごすことを約束していた。この楽しい日々が、いつまでも続いてくれれば、と願った。だが、そんな想いもすぐに崩れ去ってしまった。

入学式が間近に迫った頃、神崎は家族で旅行に出掛けていた。場所は箱根の温泉だそうで、温泉巡りなどが好きな彼女が立案したところなのだろう、と勝手に想像していた。

そして帰宅予定日。その日の朝あったメールでは、夕方までには着くと思うとあった。だが午後六時を過ぎても帰ってくるどころか、連絡の一つもない。何かあったのではと、俺は両親に聞いてみた。だが彼らも何も聞いておらず、心配しているところだったらしい。もどかしさの余り外に出ようとしたそのときだった。携帯電話の着信音が部屋の中に響き渡った。俺はそれに飛びつくようにして、電話に出た。

「もしもし、神崎か？」

「う、うん。は、早く来て！ お父さんとお母さんが、あ、ああ泣くのを堪えるようにして喋る彼女。一体何があったというのだろうか。」

「おい！ 今すぐ行くから場所を教えろ！」

「え、えっと、町の外れの、神社」

「日馬神社か。すぐだから、絶対そこを動くなよ！ いいな」

念を押して、俺はさっさと通話を切った。そして机の中に入っている白い護符の束を持って、階段を駆け降りた。すると丁度父親がいて、俺の持つ護符に目をやった。

「それを持つのは、久しぶりだな」

「使わなきゃいけないときが来たんだよ」

「そうか。じゃあ、せいぜいがんばれよ」

父親は、母親と妹と違って、それなりに俺のこの力を認めている。使いどころを間違えない限りは、一切口出しをしない。だが、手助けもしない。関わりたくないという意思を、真っ直ぐぶつけてきてくれるぶん、この父親は信じることができる。

「ああ、行ってくる」

俺は、父親に笑ってそう言い残し、神崎のもとへ走った。

## 五

日馬神社。この日馬市に古くからある神社で、三百年の歴史があるらしい。関東大震災や、世界大戦などでも傷一つつかなかった。当然そんな神社があれば有名になる。だから正月には多くの人が、市外から訪れる。

だが今は三月下旬。今の時期に神社を訪れるなんてことはほぼ有り得ない。それなのに何故神崎はあの神社に行ったのだろう。人ならざる者によって護られる神社に。

走りながら何度もそれを考えた。何故あの神社に行かなければならないのだろう、と。ただ見てみたかった？ 否、彼女は俺や家族と正月に行っているはずだ。それなのに何も無い神社を見に行っても仕方がないだろう。この時期に何かお参りするようなことでもないだろうし。

それでは何故？

浮かび上がる最終的な答えは一つだった。

人ならざる者によって護られる神社。彼らは人のために護っているわけではない。自分たちのために護っているのだ。人と関わらないために。だが正月だけは多くの人が訪れる。そのときだけは、神主との交渉によって人に危害を加えることを一切しない。だが彼ら

の主な食料は、魂。人が多く訪れる時期に魂を喰らえずに、腹を空かした者が、極稀に訪れる参拝者を喰らうことは考えられないのだろうか、と。

これこそが俺の導き出した答え。だが正解だとは思わない。思いたくもない。もしそうなら、彼女の両親だけではない。彼女自身も危ない。

しかしまだ一つ疑問が残る。だが神社まであと少しなのだ。それならばこの目で確認すればいい。

神社への石段を駆け上がる。何度も上ったことのあるこの石段がとても長く感じられる。早く上りきり、彼女たちを救わなければ。

ずっと走り続けていたため、体力に限界が近づいてきた頃、ようやく石段を上り終えた。すると目の前に広がったのは、朱色の空と赤黒い水溜り。その水溜りの中二に二人倒れていて、その側で一人が座り込み、見動く一つしない。まるで生きていないようにも見える彼らに近寄る。

思ったとおり、神崎一家だった。倒れているのは神崎の両親。座り込んでいるのが神崎だ。両親は両手足を切断されており、その切り口から大量の血が今もお溢れ出していた。それが頭で理解できると、吐き気を感じた。だがここでそんなものを感じてはならないと、必死で抑えた。

「神崎、大丈夫か？」

彼女は見たところ、傷一つない。だがその目は生きている者の目ではない。まったく生気が感じられず、俺の声にも反応しない。きつと両親の死をその目で見たのだろう。だからそのショックでこの状態にあるだけなのだ。

彼女の顔と同じ高さに自分の顔を下し、彼女の肩を掴んだ。

「しっかりしろ！ 今救急車を呼ぶから！」

呼んだところで大した意味はないだろう。だがそれでも必要なことのような気がする。彼女の両親のためにも。そして、彼女自身のためにも。

消防署に連絡をした俺は、救急車が来るまで彼女の傍についているようにと言われた。言われずともそうするつもりでいたから、帰れと言われずにホッとした。

彼女を一人にさせることはできない。今は人ならざる者の気配は感じられないが、それでも油断はできない。ただ気配を消して、タイミングを見計らっているだけかもしれないからだ。

しかし一つ疑問がある石段を上る前に感じた疑問と同じものが。この神主は何故出てこないのだろう。彼には依然、自分の能力について相談したことがあり、それに似たような能力を自分も備えていると言っていた。ならば彼は彼女を救うことだって出来た筈だ。彼が人ならざる者を退治している現場だって見た。まさか、彼が襲うように仕向けたのではないだろうか。否、それは有り得ない。彼は人ならざる者のための場所を用意していると話していた。それなのにここで人を喰わせるなんてことはしないはずだ。

俺は神主が言っていた食事場というのは墓地であると思っている。そこでなら人を殺さずとも数多くの魂を喰らうことができるから。それを確認しようと訊ねたときははぐらかされてしまったが、それらしい答えはもらっている。

そう思った直後、強風が吹いた。片手だけ神崎の肩に掴まっていたのだが、彼女が風で後ろに倒れてしまったため、俺もそれにつられて一緒に倒れてしまった。まるで俺が彼女を押し倒したかのような形になり、そこで彼女の視線が俺に向いた。

「そう、ま、くん？」

「ああ、俺だ」

出来るだけ冷静に、彼女をあまり刺激しないように言葉を選ぼう。「あ、あのね、今までお父さんとお母さんが、鬼みたいなのに殺される夢を見たの。手足をもがれて、それで心臓を抉って食べたの。手足はもがれたのに、抉ったほうには何にも傷がつかなくて、そんなことあるはずないのよね。凄く怖かったの」

今にも泣き出しそうな顔で、事実を夢であったと思いこんでいる

彼女を見ると胸が痛んだ。彼女は両親の死をなかったものにしようとしている。そう感じたから、俺は事実を包み隠さず伝えなければならぬのだと悟った。

「お前の両親が死んだのは、事実だ。鬼みたいなやつも、存在する。今この場には」

言いかけたとき、寒気を感じた。何か背後に立っている。

「貴様は、人か。それとも妖か？」

問いかけ。男とも女ともわからない、年老いた老人のようなしわがれた声。しかしその声とは裏腹に、それから発せられる殺気のようなものがピリピリと肌に伝わってくる。この殺気だけで、人を殺すことができるのではと思うほどのもの。

まるで人を憎んでいるかのようなそれに、俺は疑問を持った。当然人ならざる者は、人により居場所を奪われてしまっている。これだけでも十分に人間を恨む理由に足り得る。だが今までその恨みや憎しみを表に出さなかったはずだ。それなのに今になって、このときに何故人を殺す？

俺は、そいつのことを正面から見据えることを覚悟した。俺が人とわかれば襲ってくるだろう。それでも、俺は後ろの奴と向き合わなければならぬ。

だから、これが最後になってもいいようにと、俺の後ろにいる者に気付き震える神崎の頬をそっと撫でる。

「大丈夫。お前は、俺が命を賭けてでも護ってやるから」

「え？」

言葉にならないような声だったが、久しぶりにまともな反応をもらえた気がする。きつと、彼女は大丈夫だから。

そう思っ、俺はポケットに突っ込んであった護符を数枚握りしめ、振り返った。

視線の先、そこには俺の三倍もある巨躯の者がいた。しかしまるでテレビ画面に映る砂嵐のような外見で、その形は形容し難いものだった。



「貴様、人だな。貴様！ 我の身体を返せ！」

そいつは訳のわからない言葉を発しながら、何の予備動作もせず、ギリギリ見える速度で俺の前に突っ込んできた。最初はただそれだけに思えた。だがそのとき、俺は思い切り吹き飛ばされ、賽銭箱に叩きつけられた。身体中に強烈な痛みが走る。背中への衝撃が強く、肺が潰れてしまったのではと思うほどだった。しかし握りしめた護符のおかげでそれは免れたようだった。

俺の持つ護符には、不思議な力が宿っている。それは十分程度、俺の身体を少し頑丈にしてくれて、僅かに身体能力も上げてくれるというものだ。効果は枚数を多く握り潰すほど増大する。先ほど握り潰したのは四枚。それでも相手のスピードには追いつけなかった。ならばもっと多くの枚数を潰すしかない。残りは十六枚。しかしこれを全て使えば、限界を超え、きつと彼女を助けることなく俺の身体が壊れてしまう。だから少しずつ様子を見なければならぬ。

身体を起こし、更に四枚の護符を潰す。

直後、身体の痛みは和らぎ、再び突っ込んでくる相手の動きが良く見えるようになった。だから相手が近づいてきたところを見計らい、ギリギリのところまで避ける。すると相手は俺がぶつかった所為で歪んでしまった賽銭箱に突っ込み、粉々にしてしまった。当然中に入っていた硬貨は辺り一面に散らばる。

それを見ながら、もう二枚握り潰し、体勢を立て直そうとする相手に突っ込んだ。

相手の目がどこにあるのかわからない以上、動けないうちに攻撃するか、相手より速く動く以外に勝つ方法はない。ならば、護符を出来るだけ使わずに済む前者を選ぶ。

拳を握りしめ、それを相手の身体に幾度となく叩きこむ。出来れば相手が消え去るまでそうしていきたい。だが、それが出来るほど簡単な相手ではない。

わずかにこちらの打撃で怯んだが、すぐに次の動きを見せたのだ。左の拳を当てた直後、人肌のような感触がまるで水のようなも

のになり、俺の拳を取り込んでしまった。すぐに引き抜こうとするが、まったく身動きが取れない。そのとき、俺は大きな過ちを犯していることに気が付いた。

相手は、わざと俺に隙を見せたのだ。俺は人ならざる者にそれほど思考力があるなんて思ってもみなかった。だから単純に避けて攻撃の繰返しをすればなんとかなるかもしれない。そう思っていた。だがそれこそが大きな間違いだった。こいつは人の魂を二つも食っているのだ。それならばそれ相応の知能を身につけていたところでは何の不思議もない。それに今になるまで気付けなかった。

俺はもう、殺されるのを待つしかない。

人ならざる者が、徐々に俺を取り込んでいく。中は心地よく、このまま取り込まれるのを黙って見ているも良いような気がしてしまふ。

俺の半身が取り込まれようとするその時だった。一人の男の声、この境内に木霊した。

「喝っ！」

俺は何度もこれを耳にしたことがある。こここの神社を護る者。この神主である、鍋木正臣の声を。

すぐに俺は勝利を確信した。俺も神崎も助かる。この人ならば、すべてを終わらせてくれる。

「相馬！ 私に助けを乞うか。今まで私のもとに訪れていたのは何のためだ。自分の護るべきものを、他人に護らせるのか。もしもそうならば、私はお前を助けるつもりなどないぞ」

思いもよらぬ言葉。彼はこの期に及んで、傍観者でいるつもりなのだ。

「お前ならば、今のその状況からでも相手を打ち負かすことが出来るはずだ。残る半身にある、自分の力を思い出せ！」

そうだった。まだ俺には、十枚もの護符が残っている。まだそこらには取り込まれていない。ならば、まだ勝ち目はあるではないか。

三度、ポケットの中の護符を握りしめる。ありったけの数を。壊

れる前に、この相手だけは仕留めてみせる。中から破壊してやる。  
取り込まれた半身の側で、何かが弾け飛び、俺は意識を失った。

## 六

「そして貴方の身体の内側はズタズタに引き裂かれた状態となったが、それを鎚木正臣の力によって回復した。自宅のベッドの上で目覚めた貴方は、何故彼があの子の両親を助けなかったのか疑問に思い、問い質すため再度あの神社へと向かった。だがそこに彼の姿はなく、あの日から神社に人の姿はないのよね？」

少女は俺の隣からこちらの顔を覗き込むようにして、あのと看することを語った。何故彼女はそれを知っているのだろう。あのと看にあつたと言うが、俺にはそんな記憶など一切ない。

「その顔じゃあ、何も覚えていないのね。貴方が意識を失っている間のことを」

呆れたように溜息を吐かれ、不快に感じたがそれを抑えた。

「夢の中のことをほとんど覚えてないのと一緒にだろ。まあ、微かにも覚えているものなんだろうけどな。ふつうは。だがそれもないし、俺はそのときに何かを体験したという記憶もない。お前のことだって、昨日見たのが最初だと思ってる」

「そう、ならそれはそれでいい。ただ一つ言っておくと、あの神崎愛美は今危険な状態かもしれない。中には貴方達の言う人ならざる者がいて、その力は徐々に大きくなっている。私はそれに取り込まれそうになっただけど、どうにか外に逃げる事ができた。まあ、一瞬意識を乗っ取られて、しまっただけど。でも貴方のおかげで私は助かった」

そこで一息ついて、さらに続ける。

「貴方にはそれだけの力がある。あの護符に頼らなくても、人ならざる者を退けるだけの力が。でもこのままあれを放っておけば、貴方でも太刀打ちのできない相手になるの。だから、早めにあいつを、

「夢魔を倒さなくちゃいけない」

彼女の言っていることのほとんどが意味のわからないものに感じられるが、だが神崎に危険が迫っていて、俺ならば助けることができるかもしれないということ。

「そうだ。彼女はまた命の危険に晒されているのだ。まだ具体的な兆候は見られないが、記憶がおかしくなっている。もしこのまま放っておけば自我が崩壊し、生きているとは言えない状態になってしまうのかもしれない。」

「それだけは避けなくてはならない。だがその前にどうしても知っておかなくてはならないことがある。今隣にいる少女。彼女もまた、人ならざる者。神崎の中にもそれがいるという。そして彼女は神崎の中のものに取り込まれそうになった。つまり人ならざる者は、共食いをするということなのだろう。では、それと人の魂を喰らうのでは何が違うのか。素直にそれを問うと、彼女はなんの躊躇いもなく答えてくれた。」

「違いならあるわよ。人の魂を喰らうと得られるものは、空腹を満たすというだけのもの。けれど、自分以外の人ならざる者を喰らう、取り込むといったことをして得られるものは、空腹を満たせるだけじゃない。自分の強さのパラメーターを上げることになるのよ。別に人の魂でも同じことは可能だけど、数の問題よ。人を喰らうより、仲間を喰らったほうが、ずっと良いつてこと。まあ私の場合は、それでも大して強くなれないけれどね。もう、それすらもできない、不安定な存在だから」

最後の消え入るような声は、ほとんど独り言のように聞こえた。表情もどこか物憂げで、もう余命幾許もない者のようだった。

だがその表情もすぐに明るくなり、別の話をし始めた。

「そうだ。これから私、ここであなたと一緒にいることにする」

「はあ？」

いきなりわけのわからないことを言い出す少女。藪から棒にそんなことを言われて、はいどうぞと言えるはずがない。それに人なら

ざる者、つまり普通の人間には見えないからと言って、万人に見えないわけじゃない。俺や俺の家族だって、一応見ることはできる。俺以外は力など持ち合わせていないが、それだけのことはできるのだ。

もしかしたら他にも見える人間がいるかもしれない。否、神崎も見えているはずだ。あのときの体験から、たまに変なものを見るようになったと相談を受けたことがある。もしこのまま一緒にいることになれば、俺の私生活に支障をきたす恐れがある。それなのに一緒にいるなど、無理がある。

「無理だ。絶対に」

「貴方の許しなんて関係ない。私はここにいる。私にはもう、誰かの命を奪ったりする力すらない。つまり自分で自分の身を守れないの。だから、貴方に護ってもらえない。大丈夫、あの神崎愛美を助けるときは、手助けしてあげるから。あ、それから私のことは、これから葉月と呼ぶこと。よろしくね」

満面の笑みで勝手なことを言うそれは、神崎のものにどこか似ているような気がした。俺は女性に振り回されるタイプなのかもしれないと、心の底からそう思った。

### 第三章 夢魔

—

人の命とは儚いもの。心臓が止まれば、それで終わり。心臓だけではない。脳でも同じことだ。人間とは脆く、弱い生き物だ。だがそれでも知恵を持つ人間は、その弱さを隠す術を得た。

鯨やライオンといった生き物から身を守るための武器があり、自然災害を予知する技術までも得ることができた。だが、目に見えない生き物に対しては何もしてこなかった。今ではほとんどの人間がその存在を信じていない。妖、幽霊といった類のものはすべて無視される。科学で存在が証明できないものなど、何かしらのきつかけがない限り万人が認めることはない。

そう、きつかけがあればいい。しかしそのきつかけは、多くの犠牲を伴うだろう。否、むしろそうでもしなければ人々は信じない。信じようとしなない。だから、私が直接手を下さなければならぬ。

人類の未来のためにも、私は悪とならなければならぬ。仏に仕える身であっても、否、仏に仕える身であるからこそ、人々のために悪となるう。そのためにはまず、一つの町を滅ぼさなければならぬ。

たとえば、どんなに親しかったものがいても、例外なく滅ぼす。それこそが、人ならざる者を人々に伝えるための、効率的な手段なのだ。

—

「いやー、今日はみんな良く集まってくれたね。部員二名、私、部長を含め三人全員集合してる！」

場所は図書館のエントランス。ここ久坂<sup>くさか</sup>図書館は、日馬市唯一の

図書館で、広さは久坂高校と同じぐらいで、所蔵量は二十万冊を超えていて、その三分の一近くはこの日馬市に関する書物が置いてある。この市一帯の土地にどれだけの歴史などがあるのかにはあまり興味はないが、もしも『週刊久高』のネタが集まらないことがあれば、この市に関する膨大な書物に目を通すつもりでいる。

「良く集まってくれたね、じゃないですよ、部長。てかあの人はいないんですか？ えっと、相馬先輩」

黒ぶち眼鏡を掛けた中肉中背と言った感じの男の子は一年生の相沢浩太。

「いや、あの人は部員じゃないでしょ。まあ、新入部員はその辺知らなくて当然か」

茶色いツインテールが特徴の女の子は、こちらも一年生の早乙女麻奈。相沢よりも少し早く入部している。

「へえ、あの人部員じゃないんだ。その割に結構この部に入りにてみたいですけど、何ですか？」

真顔でそう訊ねてくる相沢さんに、私が答えようとしたところを遮って早乙女さんが口を開く。

「決まってるでしょ。相馬先輩と部長は付き合ってるの。だから部長の手伝いを相馬先輩がしてるってわけよ」

「へえ、そうなんですか」

自信満々に腕を組んで踏ん返り返っている早乙女さんと、ありもしない事実を真に受けて、感心するように頷く相沢さんの二人を見て、私はつい口を開いてしまった。

「わ、私と相馬くんは関係ないから！ 確かに朝まで一緒だったけど、別にそんな関係じゃないから！」

「それを付き合っていると何と云うんですか！」

二人は口をそろえて叫び、私は後悔した。何故こんなことを言ってしまったのだらう。口に出さなければいいものを、これで私と相馬くんが付き合っているという噂は、始業式とともに学校全体に伝わるだらう。

今日は昨日相馬くんから貰ったメモから、三人で自殺の背景にあるものが本当に虐めだけなのか、何故遺書がないのか、ということを考えて。しかし結局は推論でしかない、ということで、各自担当して調べることにした。

まず私は自殺した原因が虐めだけなのか。相沢くんは本当に遺書等が残されていないかどうか。早乙女さんには加害者側の調査をお願いした。もしかしたらこの自殺の件は、虐めなんかよりもっと深いところに、根がある。なんとなくだけれど、そんな気がして仕方なかった。

### 三

「ありがとうね。早乙女さん」

「いえいえ、先輩の頼みですもの。喜んで引き受けちゃいましたよ」笑顔で私を見上げる早乙女さん。一年生の平均身長よりも少し低いらしい彼女は、本当に小さく、百六十五センチほどしかない私でも、彼女と並んで歩くと頭二つ分ぐらいの差があるのだ。

彼女はそれを気にしていないのか、その顔には笑顔が絶えず、天真爛漫に振る舞っている。それが偽りだとはとても思えない。だから私も気兼ねなくこの子と接することができる。

「でも、何で一緒に帰ろうなんて言い出したんです？」

これから少し歩いたところには、日馬神社がある。以前の記憶から、この前を通るだけで足が竦み、歩けなくなってしまうことがある。そのときは相馬くんがいたから無事家に帰ることができたが、今はそういうわけにはいかない。図書館に行くときはタクシーを使ったため、ほとんど意識する間もなく過ぎ去ってしまった。しかし帰りはそうはいかなかった。財布の中に入っている金額的に問題がある。

まさか千円札一枚しか入っていなかったとは、来るときに何故確



認しなかったのだらうかと今さらながら後悔し、後悔先に立たずという言葉が嫌というほど自分に突き刺さる。

「うーん、ちょっとね。もし機会があったら話すっていうのは、駄目かな」

「……いいですよ、別に。誰にだって話したくないことの二つや二つはありますもん」

それは早乙女さんにもそういうことがあるということだらうか。

否、あるのだらう。だがそれを探ろうというのは間違っていると思うし、彼女だって私が言いたくないということを変えたら、それ以上は突っ込まないと言ってくれたのだ。それなら私がここで言うべきことはただ一つだ。

「ありがとね」

「え、そんなこと言われるほどのことしてませんって。さっきも言いましたけど、誰にも話したくないことなんて誰にでもあるんです。それに、先輩だって私のそれがどんなものなのか、気になる風なことを口にしないでくれました。それだけでお礼なんて言ってもらわなくていいんですよ」

満面の笑みで、まるでそれが正論であるかのように言っただけ。それが正しいのかどうかかわからず、彼女のその言葉は本当に正論であるかのように錯覚してしまいそうなのものを感じた。

彼女は、とても素直で正直な子なのだ。まだ知り合ってから半年にも満たないなりに、彼女がどんな子なのかわかってきた。

思えば彼女は、相馬くんの次に良く会う人だ。私はそれだけ彼女を信頼出来ている。この可愛い後輩は、私の味方だと信じ切っている。

そして今、ようやく気付いたことがある。私は今まで通るときにどうしても意識してしまうはずの日馬神社前を、なんなく過ぎ去ってしまったていた。

何故だらう。あんなに嫌な思い出がはっきりと、今でも思い出せるといふのに、何故こうも簡単に通ってしまったのだらう。まさか、

私はあの夢を見たのだろうか。もしかしたら“夢を見た”という事実さえ忘れてしまっている？

その可能性は十分にある。私はあの夢そのものを嫌な思い出と、頭の中でそう捉えているはずだ。そして一度に忘れられることが一つだけとは限らない。だから夢を見たという事実と、もうひとつ、神社に関する何か、自分でもわからない何かを忘れてしまっているのだ。

私の親が死に、相馬くんが傷ついたあの日のことの、何かを。

#### 四

葉月は決して俺の部屋から出ようとはしなかった。それは自分の力の弱さを認めているということだ。

つい先ほど気付いた事だが、昨夜は何も身に纏っていない、つまり全裸の状態だったはずなのに、今は黒い喪服のようなものを纏っている。これはいったいどういうことなのだろう。

そういえば昨夜感じた黒と白という感覚は彼女に感じられない。どちらかに偏っているというか、寧ろ白一色で、とても純粹で綺麗な存在のようだ。もしかしたら昨夜は夢魔に取り込まれそうになっていたために禍々しさを感じたのかもしれない。

今の彼女にはまったく禍々しさなどない。性格には多少の問題はあるように思うが、それでも人間と同じような者がいるぐらいに人と同じような、そう、人に極めて近い人ならざる者。彼女はきっとそういう存在なのだ。

もしかしたら死後の経過時間が短いうちに人ならざる者へと変化したものかもしれないとも考えたが、彼女は一年半も前のことを知っていて、その後は神崎の中にいたという。つまり最低でも死後一年半、若しくはそれ以上経っているということになる。以前鍋木から聞いた話では、どんな生き物も死後半年以内に人ならざる者になるか、それにならずに浄化、もっと簡単にいえば成仏するらしい。

彼は良くわからない人間ではあるが、今まで嘘を吐かれたことはない。だから一応それは信じておく。となれば俺の隣にいる、小柄の少女の姿をした人ならざる者は、まったく異質な存在なのだろう。以前神崎の両親を殺し、俺の命を賭して倒したやつとも違う。むしろやつこそが人ならざる者の最終的な姿の一つなのだ。

葉月はそれらとは全く違う。可能性の一つとして、彼女は“人ならざる者”という大枠の中に入らない存在だということも考えられる。彼らとは違う、異なる存在。鈴木も多分知らないだろう。まず彼が知っていたら、神崎の中に入る前に何とかしているはずだ。それができなかつたということやはり、未知の存在なのかもしれない。しかしそこで、一つ引つ掛かるものがあつた。それを取り除くためには、葉月にいくつか質問をするしかない。

「なあ、夢魔つてやつはいつ神崎の中に入ったんだ？」

「ええと、貴方達が学校で自殺した男の子を見たとき、かな」

「ちよつと待て。何で俺じゃなくて神崎なんだ？ お前はその時点でそれほど力がないにしる、何も中にいない俺のほうが狙われるんじゃないのか？」

そこで葉月は不思議なものでも見るかのように首を傾げた。

「貴方の中に入るでしょう？ それに言ったでしょう。貴方には力があると。それが私よりも強かつた。貴方の中に入つても、何も通じないということが、接近した瞬間にわかつた。だからその場にいた二人のうち、弱いほうに入り込んだ。自分でも抑え切れる自信があるほうに、ね」

「俺にはその力つてのが理解できないが、それ以前に一つ気になることがある。その夢魔は、どこから出てきて神崎の中に入ったんだ？」

「自殺した男の子の中よ。あれに生気を吸い尽された者は、自殺願望に目覚めてしまうというか、嫌な思い出だけが募り、最終的に自分がこの世から消えさることで救われると思ひこんでしまう。そういうことなんでしょうね。まあ、これもあの子の中にあれが入つて

くれたおかげで分かったことなんだけど」

つまりはこうだ。自殺した一年生の中には夢魔がいて、そいつは取り憑いた人間の生気を残らず吸い尽し、その人間は自ら命を落とす。そしてその魂を夢魔は喰らい、その近くにいる人間にすぐ取り憑いてしまう。

「たぶん、最近この市内で起きた自殺のほとんどが夢魔の仕業だと思う。少なくとも、貴方の通う学校の近辺なんかは特に」

葉月がそう言い終えた直後、携帯電話に着信音が鳴り響いた。サブディスプレイに映し出された名前を見る。そこには早乙女という文字があり、俺は一瞬首を傾げた。その早乙女という名前を、忘れかけていたのだ。

しかしそれが報道部の後輩だと思いだし、それに出た。

「あ、もしもし、相馬先輩ですか？」

「ああ、そうだけど。珍しいな。君が電話かけてくるなんて」

「いや、ちよつといろいろとあります。というかあの、今日馬神社を過ぎた交差点の角にある喫茶店にいるんですが、神崎先輩を迎えに来てくれませんか？ 具合が悪いというか、神社を過ぎたあたりからちよつと暗いんですよ。とりあえず様子がおかしいのでここで休憩して行くということにして、今トイレから電話かけてるんです」

神崎の調子が悪くなった理由などわかりきっている。日馬神社。

それが原因だ。急ぎ立ち上がり、携帯電話と財布をジーンズのポケットに入れる。すると葉月が何をそんなに急いでいるのかと訊ねてきた。

「神崎が日馬神社の前を通ったんだ。だから迎えに行ってくる」

葉月は思い出したかのようにわかったと頷き、いつてらっしゃいと小さく手を振った。俺はそれを背に走り出した。

喫茶店に着くころには空は茜色に染まり、日が沈みかけていた。

喫茶店まであと少しというところで早乙女に連絡をし、店の前で待

っているようにしてもらっていた。そのときにようやく神崎に俺が来ることを知らせたらしい。俺と目が合った瞬間、少し驚いたような表情をしていた。

俺が合流すると、早乙女はそそくさと退散してしまった。まるで俺たちに気を使っているかのように。だが今はそれとは少し違うことはわかってる。彼女も本気で神崎のことを心配している。だから自分よりも神崎のことを知っている人間を呼んだのだ。

「何できたの？」

それが、早乙女がいなくなったあとに放った一言だった。俺は一瞬ぎよつとし、だがちゃんと説明をした。早乙女から連絡があり、心配になって来た。来てくれと頼まれたということは敢えて伏せておいたが、それは有効だったらしい。

「そっか。ありがと。それと、ごめん」

きつと俺が気を使ってくれたことについてお礼を言い、そして謝っている。

「謝る必要はないだろ。俺が好きで来てるんだ。それに、以前俺が言ったことを忘れたとは言わせないからな」

俺は彼女を護ると誓った。それは一方的なものだが、それでも彼女は受け入れてくれた。だから俺は、彼女が困っていれば助けるし、辛い思いをしていれば励ましもする。

それが罪滅ぼしだからじゃない。命を賭けても護りたいと思うほど大事な人だから。だからこそ、そう誓えたんだ。

だから一刻も早く、夢魔を何とかしなくてはいけない。その存在を消し去る術。それを一日も早く見つけ出し、彼女が自らの命を絶つことだけは避けなくてはならない。

## 五

俺は早乙女に呼び出され、四日前に神崎を迎えに行った喫茶店に来ていた。あまり広くない、どちらかといえばこじんまりとしたこ

の喫茶店は、結構人気のある場所だ。そのためほとんど満席状態なのだが、並んででもここで話をしたかったらしく、十分程度待って漸く席につけた。

「で、話つてのはなんだ？」

椅子に座るなり、メニユーに目を通しませずに訪ねた。今日は神崎に先日の夜のことを伝えなければならぬ。結局あの日は伝えられず、今日にまで伸ばしてしまっているのだ。彼女自身はすっかり忘れていたようで、俺が一言いったら思い出し、早く教えると言ってきたところで早乙女からの連絡だ。

神崎が帰ってきてからでいいと言ってくれたから、今こうして早乙女の前にいる。彼女は俺を見据え、黙ったまま口を開こうとしない。しかしそれもほんの少しだけだった。すぐにウエイトレスが注文を取りにきたからだ。

「私はホットコーヒーで」

「じゃあ俺も同じの」

ウエイトレスが笑顔で立ち去って行くのを見て、早乙女は小さく笑った。

「まだ夏だつてのに、ホットコーヒーなんて飲んで、大丈夫なんですか？」

「お前も頼んだだろ。それも先に」

「順番は関係ないですよ。それに私、コーヒーはホットと決めていますから」

俺もそうだと返し、本題に入るよう言った。

すると彼女は真顔で俺を見つめ、まず四日前に神崎から自殺した一年生を虐めていた側について調べるようにと頼まれていたことを知らされた。そしてこれから話すことはその結果であることが前提にあるものとして聴くようにと念を押された。

つまりはこれから話すことはそれほどまでに信じがたいものなのだろう。まず俺は、たった四日、否、頼まれた日はほとんど神崎についていたのだから、実際には三日でそれだけのことを調べてしま

った早乙女が信じられないのだが、たぶんそれよりも信じられないようなことを、彼女は口にしようとしている。

「最初に虐められていた一年生、私も相沢もクラスが違うし、元々影が薄い存在だったらしいので、彼のことは一切知りません。廊下で擦れ違ったことがあるかな、と思う程度ですね。そういう人の一人や二人、先輩にもいますよね？」

それはそれで失礼な発言だが、表情が真剣なものなので首肯一つで終えた。

「まあ、そんな彼だし、虐めている側の生徒も札付きの悪みみたいなもので、誰も止めようとはしなかつたんですよ。あとほら、先生もその中にいたみたいだし、余計ですね」

そこで丁度コーヒーが届き、またウエイトレスが去るまで口は閉じたままだ。自殺した人のことに関して話しているのだ。そんなことを無関係の人に聞かれるのはあまりいい気はしない。

「で、私はそう思いながら虐めていた側の生徒と教師の家に押しかけてみたんです。するとかかなり意外なことがわかつたんです。まず生徒のほう。彼らは皆、至って普通の生徒です。寧ろ自殺した子と同じように、どちらかというが目立たない人間です。決して不良だつたりとか、そう言つた経歴を持たない子たちでした。ただ虐めに関わっていたことには嘘はないみたいでした。

ただ普通自殺に陥るような虐めは一切してないらしいです。どちらかというと軽くからかつた程度で、それ以上のことは何一つしてなく、それも一回きりだったらしいです。担任の先生に聞いてみても帰ってくる答えは似たようなもので、からかつているのを笑いなから止めたぐらいだと言っていました。これらに関しては恐らく、学校側の裏の事情があるんだと思います」

「そうか」

あまり聞きたい話ではない。自分の通っている学校で、自殺した生徒がいることについてなんらかの事を起こさなければいけない状態であり、そのために四人の生徒を退学させ、教師も一人辞めさせ

られた。まったくふざけた話ではあるが、このふざけた話にはまだ続きがあるような顔で早乙女が俺を見ていた。見ながらコーヒを少し口に含み、飲み込む。

「まあ、ここからは大したことじゃないんですけど、この五人は皆、同じことを言っていたんですよ。自殺した彼は、からかわれていたことなど、一切覚えていない、と」

やはりあの一年生が死んだのは夢魔の仕業らしい。葉月の言っていたことが嘘ではないのだろうと、今頃になってようやく思えた。俺はまだあの異質な存在を信じられていない。俺が返ってくると、待ちかねていたかのように喜んでくれるのに、そんな彼女を信じることができない。

彼女は、人じゃないから。

「先輩、一応話はこれだけです、部長の体調とか大丈夫そうでしたら伝えてあげてください。あと、気を付けてあげてくださいね。ここに来て欲しいと伝えたと、部長に電話したんですが、あまり元気がないような感じだったので。たぶんあの人を助けられるのは先輩しかいないですから」

自分にはどうすることもできないことが悔しいのか、少し寂しそうな顔をする彼女にかける言葉が見つからない。彼女は神崎のことを気遣っているのに、結局は俺に託すしかないと思っっている。

「じゃあ、俺は行くぞ。金置いとくから、それで払っとけ」

こんなことしか言えない俺は、どうしようもない奴だと自分で思う。だがそれよりも気になることがある。神崎のことだ。俺が出かけるときは、普段と変わらない明るい声で話していたはずだ。それが早乙女と話したときにはそうでなかった。

店を出て、交差点を渡る。

これからは何かあったら俺に話すように言おう。絶対にそうしてもらわなければ困る。そんなものこちらの都合だというのはわかっている。だが、それでも、俺は彼女を護りたい。なんとしてでも、夢魔の魔の手から救い出してあげたい。



今の、なんの力ももたない俺には何もできないかもしれないけれど、それでもできる限りのことはやってみせる。後悔はしないように。彼女に悲しい想いをさせないように。

「軟弱だな」

その声に振り向いた瞬間、視界が真っ白になった。

## 六

生臭坊主。その言葉がぴったりそのまま当てはまるような存在に会ったのは、小学五年生の頃だ。

その頃の俺は、幽霊という存在と普通の人間との区別をしなくてはならなくなっていた。人前で、本来目に見えないはずの存在と接することを避けるようになった。それまでは友達も家族も俺のしていることを面白がっていた。だが五年生、上級生という立場上からも、同級生たちから気味悪がられ、家族もその遊びを止めるようにと言いはじめた。始めは遊びなんかではないと言いつづけていたが、ある日突然、母親から言われた一言で俺は諦めた。

“ 本当だろうが、嘘だろうが関係ない。世間で認められないことを堂々とするのは野蛮でしかない ”

確かそんな風に言われたような気がする。もしかしたらもつとわかりやすいように言われたかもしれない。だがそんなことはどうでもいいんだ。俺は幽霊という存在を見てはいけないのだと自分に言い聞かせ、一切その存在に触れようとしなかった。

それから半年ほど経った頃、丁度夏が終わりを迎えようとしていたある日のことだ。どうしてそこに行ったのかまでは覚えていない。俺は日馬神社の賽銭箱の傍の石段に座っていた。

そこはちょうど日陰になっていて、暑さを凌ぐには良い場所だった。周りには木々が生い茂り、吹きかかる風は心地良いものなのを俺は当時から知っている。

俺が彼の存在に気付いたのは、日が沈み始め、空が茜色に染まり

かけた頃だった。彼は俺を見降ろして、小さく笑みを浮かべて見せた。彼の着る狩衣かりぎぬと差袴さしこは白く、普段見慣れない色のそれは、当時の俺からでもだいたい異質なものに感じられた。本来もうひとつ、烏帽子を被っていないければおかしいのだが、当時の俺にそんなことはわかるはずもなかった。

彼は俺の隣に腰を下ろし、一緒に何も言わずに時間が過ぎるのをただ待つていた。待つ理由などない。ただ待ちたいから待つていた。「暑いな」

そう呟いた彼を見上げ、そうでもないと返す。彼はここの神主で、着ているのも神に仕える者のそれであるのだが、髪の毛は長く、後ろで結っている状態だ。神職には似つかわしいほどの髪。それに関して聞いたとき、彼は女にもてなくなるから坊主頭にするのだけは勘弁だと言つていた。

そして俺に、人ならざる者が見えるかと問うてきた。ふつうそんな質問する人間はいない。いてもそれを信じる者がいない。俺のような、特別な人間を除いて。彼はきつと知つていたのだろう。俺が人ならざる者（当時の俺は幽霊と言つていた）を見ることができるといふことを。

彼はいろんなことを教えてくれた。人ならざる者についてのことがほとんどだったが、他にも俺が知りたいと思つたことのほとんどを彼は知つていて、冗談交じりに教えてくれた。俺が十四のとき、彼から紫色の字が書かれた護符を買つた。もしも大事な人が危険な目に遭つたときに使うようにと。

護符に秘められた力。護符に封じられた力を、文字が形を為さなくすることによって解放する。そうすることで力は身近な者に宿り、その者の身体能力を向上させることができる。当然それには代償があり、多くの護符を使用すればそれだけ能力が向上するが、必要以上に肉体に負担がかかってしまう。そのため一度に使う枚数は制限されていて、二十枚以上を一度に使用することは避けるようにと言われていた。

それからというものの、俺は彼の指導のもと護符を使用した特訓をさせられていた。いつ何時強力な人ならざる者に遭遇するかわからない。それに遭遇したときに、大事なものを護れるようにと、この特訓は開始された。俺にそんなに大事なものができるとは思わなかったし、そんな強力な奴が現れても、目の前で俺を指導している本人、鎬木がなんとかしてくるんじゃないだろうかと思うのだ。それでも彼は有無を言わせず特訓をさせてきた。何度か逃げようかと思案したが、きっと彼はどこまでも追ってくる。そんな気がしたのだ。

何せ彼は、学校が休日で寝て過ごしていて、気付いたら約束の間を過ぎていたとき、我が家まで迎えに来るぐらいだ。俺は家の場所を教えていないというのに。それならばどこに逃げようとも追ってくるのではないかという恐怖心によって、逃げることなど一度もしなかった。

それから三年間、厳しいだけの特訓は続き、そして忌まわしきあの日を迎えた。神崎の両親が殺されてしまったあの日だ。

あの日、何故彼は神崎の両親を助けてくれなかったのだろう。あのときはいなかった？　もしかしたらそうなのかもしれない。俺が苦戦を強いられているときにちょうど戻ってきて、そして助けを乞うことを止めさせたのかもしれない。

それでも、俺は彼を許してはいけない気がする。長時間留守にするなら俺に連絡してくれればいい。なのになぜそれをしなかったのだろうか。すぐに帰るつもりだったが、予定外のこと起きて帰るのが遅くなってしまった？　彼に限ってそれはないだろう。彼は見た目からしていい加減だ。仕事はするがそれだけで、あまり評判も良いものではない。

たまに子どもからは人気があるという声もあるが、やはりそれで大人から見た神主としての評価というものはそれほど良くはるはずもない。

そんな彼は、俺に護符を大量に使わせるような言動を発し、そし

て俺はそれに従った。結果神崎の親を殺したやつは倒し、俺は気を失ってその間に鐺木からなんらかの治療を受け、ほとんど無傷の状態を目を覚ますことができた。

しかし、俺は彼にそのときの礼を言えていない。彼は俺を助けたあと、どこかへと消えてしまったのだ。最後に言葉を交わした神崎からは、しばらく帰らないということだけ伝えられた。

そしてその彼は今、俺の目の前にいる。喫茶店の側で声をかけられ、その直後に気を失ったところまでは覚えていて、気が付いたときには神社の境内に座っていて、今まで夢を見ていたのではと錯覚してしまった。それにその追い打ちをかけるように鐺木が俺の目の前に立ち、見降ろしてきているのだ。

「よお、久しぶりだな」

だがこの言葉で、今までのことが夢でなく現実であったことがわかる。

「本当はお前が力に目覚めるまで、戻る気はなかったんだ。だがな、お前があまりにもものんびりし過ぎているから、お前の大事な人はまた危険に晒されている。本当に、おるか者だよな」

言われなくてもわかっている。だが俺にはどうすることもできない。彼女を救う力など、どうやって手に入れればいいというのだ。

鐺木は俺の考えていることが分かっているように、頬を緩めて、俺の頭を思い切り殴ってきた。あまりの早さに追いつくことができず、見事に直撃してしまう。

「少し避けたな」

彼がそう呟き、そうかそうかと一人頷いている。

「おい、今すぐあの娘のところへ案内しろ。さっさと決着けりをつけさせてやるから」

一瞬、俺は彼の言葉の意味を理解できなかった。

## 第四章 最後の夢

—

遅い。

何がって、相馬くんが帰ってくるのが、だ。もう彼は五時間以上経っていて、外は夕陽が沈みかけている。早乙女さんからの用事はすぐ終わると言っていたはずなのに、どうしてこんなに遅いのだろう。

もしかしたら、何者かに襲われでもしたのだろうか？ 否、彼を一目見て襲う気になれる人間なんてそうはいないだろうから、この可能性はほぼ皆無に等しいことにしておく。

それでは他に考えよう。例えば……、  
「早乙女さんと付き合ってる？」

口にしてすぐにその考えを振り払った。そんなことあるはずがない。だって、早乙女さんとは私のほうが一緒にいるはずだし、話も良くする。

でも、そのときに相馬くんの話も良くする。

そして、私が知らないところで二人が会っていたとしても、なんら不思議なところはないのだ。私はあまり外に出ないし、私の活動範囲ぐらい相馬くんなら把握しているはずだ。

それに早乙女さんにも “誰にも話したくないことなんて誰にでもあるんです” と言っていた。そしてそれが、自分にもあることも。もしかしたら彼女の話したくないことというのが、相馬くんと付き合っているということなのではないだろうか。

私は、どうしたらいいのだろう。好きになるのに順番なんてない。そんなことはわかっていても、やきもちを焼かずにはいられない。ただ、それを表に出すことだけはしてはいけない。否、きっとできない。私は相馬くんのこと好きだけれど、早乙女さんのことも好

きで、そんな二人が結ばれればそれは良いことではないか。

本来私は、彼らを祝福するべきなのだ。

けれど、それでも、やっぱりそれは無理だ。

私は相馬くんのが好き。早乙女さんのことよりも、遙かに。

比べ物にならないくらいに。誰のことよりも、彼のが好き。

そう思っただけで、私の頬に涙が伝い落ちてきた。最初はほんの微量だったのに、次第に大粒のそれが、ポロポロと落ちていく。止めることなんてできない。もうすぐ相馬くんが帰ってきてしまうかもしれないというのに、止まらない。早く、止まれ。

「止まってよお」

そう口にした直後だった。

「私は貴方の苦しみを、取り除く者。貴方が口にしなくとも、私が貴方を救います」

夢の中でしか聞こえなかったはずの聲が、今まさに、私の後ろから聞こえたのだった。

二

本来なら急いで走るのが当たり前なのだが、彼女の家に着く前に俺に話さなくてはならないことがあるらしく、早歩き程度での移動となった。

「それで、なんですか？ 話さなくちゃいけないことって」

「ああ、とりあえず、お前がその葉月つてのから聞いた夢魔の情報は、不完全だ。というか、その葉月も知らないんだろ。私がその情報を補ってやる。まず力の弱いうちは夢の中に介入するくらいのことしかできない。つまり、自我のしっかりしている状態で自分の姿を、そう、人ならざる者を見えない人間に自分の姿を見せ、声も聞こえるようにするにはそれ相応の力を要する。」

きつと今まで起きた日馬市での自殺者のほとんどが夢魔の被害者だ。となるともうそろそろ相手にいつでも自分の姿を見せ、特有の

力を行使できるはずだ。嫌な記憶と引き換えに精力を奪うという力をな」

彼のその言葉で、事態の深刻さが一瞬で飲み込めた。それはつまり神崎の命が危険に晒されているといってもいいということだ。ならば、急げ。

彼女にとつての嫌な記憶。両親が殺されたあのときの記憶。あれを忘れさせてはならない。それだけじゃない。彼女の中にある記憶の一つ一つが大事なものなんだ。どれが欠けても彼女ではない。自分の意志とは関係なく、接し方の一つも変わってしまったては、それはもう神崎愛美という人間ではないのだ。

そうなつてはいけない。させてはならない。俺は、それを止めるために存在するんだ。誰のためでもない、神崎愛美、彼女を護るためだけの、それだけだが、それでも俺には一番大事なこと。

心から想う彼女を、俺は護る。そのために俺は……。  
「気負うなよ。私が教えたことは、こういふときに慌てず対処できるようにするためのものだということを忘れてはいけない」

俺の心を見透かしたかのような視線。好意的な視線ではないのはわかってはいるが、それでも彼のことは信用できる気がするから不思議だ。

そういえば俺の中に眠るといふ力。これはどうしたらいいのだろう。こんな土壇場にきてまだなにもわかっていない。どうしたらその力を使えるのか。そもそも本当にそんな力があるのか。俺には、未だ信じていけない。もう、人ならざる者のほとんどを目にすることができないというのに、それらに対する力など俺が持っているはずもないんだ。

そう思っているところで、隣が歩調を速めた。  
俺もそれに合わせて歩く。

「慎治、お前は何かわかっていないんだな。お前に眠る力。それを引き出すには、彼女のもとへ行くしかもう方法はない。否、あるにはあるが、手っ取り早い方法がこれだけだということだ」

こう言われても、それでも実感できないものが自分の中にあるなんて……。あまり信じたいことではない。だがやはり彼の言葉は信用できるもののように聞こえる。なんだろう。この感覚は。

そもそも、おかしな点が多すぎる。何で彼はここまで夢魔に詳しいのか。それ以前に、いきなり消えて、そしていきなり現れた人間を、俺は何故信用できるのか。師弟とか、そういうものじゃない。俺はそこまでこの人を尊敬しじゃない。

では何故？

彼には俺の心もほとんど読まれていて、俺が訊ねなくても必要な答えを出してくれる。それだけが理由か？

違うだろ。

もっと他の、重要な理由があるはずだ。

例えば、

「俺は操られている」

立ち止まり、口に出してしまえば、後はもう楽だった。俺と鍋木は少し離れたところで、向き合った。

「どうした？」

先ほどの俺の呟きは、彼に届いていなかったらしい。不審な顔で、首を傾げる。俺の中を見透かすことができない、苛立ちのようなものすら既に彼の顔には浮かんできている。

俺は愚かだ。再開した瞬間に、疑うべき人間は側にいた。すべての元凶と呼べるであろう人間がここにいる。どこで神崎の両親は死んだ？ 側にいて、助ける力がありながら手を出さなかったのは誰だ？ 俺を助けて自分を信用させ、それでも自分の身を守るために消えたのは誰だ？ 今になって俺らを再び混乱させ、自分の位置を確固たるものにしてしているのは誰だ？

そんなもの、問うまでもない。答えはもう出ている。否、俺がこの答えを出したことさえも、彼によって導かれたことなのかもしれない。だが、それでも、誰が夢魔をこの日馬市に放ったのかはわかりきっている。



「鍋木正臣、あんた、自分のしたことがどういふことか、わかってんのかよ！」

怒りに任せて出た言葉。それを聞いた彼は、不気味な笑みを浮かべた。

三

美しい女性。初めて見るわけでもないのに、それでも見惚れてしまふほどに美しい容姿だ。白い肌、黒い髪、そして、何も映さない異様な瞳。それまでもそれが、彼女の美しさの一部であると思ひ込みそうにもなる。

そして彼女は言った言葉を思い返す。

「私は貴方の苦しみを、取り除く者。貴方が口にしなくとも、私が貴方を救います」

それはつまり、夢の中とは違い、口に出さずとも私の記憶を消し去るつもりだということだ。

けれど、一体どうやって？

そう思っていると、彼女はゆっくりと私の前に近付き、まさに目と鼻の先まで来て、目線まで合わせてきた。

美しい笑顔。美しい髪。女である私が、彼女に見惚れてしまうほどだ。それ自体が怖い。彼女の美しさが、リアルな私の感情を恐怖へと陥れる。

彼女のそれは、有り得ないのだ。有り得ない美しさ。まるで自分は女神であることをその姿で物語っている。だが、彼女のしていることは神が成すであろうそれとはまったく異なる。

彼女という存在が、別次元のものだ。生きている人とは違う。生きていないからこそ、こうして美しい姿で人の前に現れる。つまり彼女は、私の両親を殺した存在と同じだということだ。忌々しい存在。憎むべき仇。それと同じような存在が、今日の前にいる。

パシン！

そんな音が聞こえた。私は無意識のうちに、彼女の左の頬を平手打ちしていた。私はそれに驚いていた。何故避けられなかったのか。何故、彼女自身も驚いた表情をしているのか。

しかし私がまだ驚き放心状態であるのに対して、彼女は再び笑みを浮かべた。

「そう、貴女はもう、私を必要としないのね。それなら、もうすべて喰い尽してしまうしかない。残念だわ」

白い腕が私の首に伸びる。両手に力を込め、そして顔はお互いの息がかかる距離まで近付いてきている。本来なら、恐怖や驚きなどから抵抗など出来ないのだろうか。否、それはテレビとかのフィクションの話であって、実際には違ったりするものだ。少なくとも、私の場合はそうだ。私はこんなものより怖いものを見ている。もっと大きく、人の形はしているが見た目は鬼など、そういうものに近い相手。私の両親を殺し、相馬くんまでもが死にかけた忌わしき、敵。あれに比べればこんなもの、怖くもなんともない。最初に感じた恐怖は、偽物なのだろうか。

私は首を横に振る。そんなことはどうでもいいと。今は、自分の危機を脱することに集中しろと。

相手を睨みつけ、腹を蹴飛ばしてやった。

か細いその身体は、見た目通りに軽く、簡単に私から離れてしまった。相手の力は、不思議な能力を除けば人のそれとなんら変わらないように見える。

「なんだ、私でも戦えるじゃない。相馬くんじゃなくても、私だけで十分に戦える。もう、誰にも頼らなくても大丈夫」

鏡の前にへたり込む美しい敵。少し視線を上げて、自分の表情を見た。笑っている。頬を吊り上げて、不気味なほどの笑みを浮かべている。これは私？

否、そんなことはどうでもいい。今は、自分の為すべきことを為せばいい。頭の中でずっと同じことを言う言葉通りに。

殺せ。

こちらを見上げる彼女の顔には恐怖の色が見える。私に恐怖している。だが、逃げる素振りも何もない。まるで殺されることを恐怖しながらも待ち望んでいるような、そんな様子が窺える。

それでも、そんなことを考えてもどうせ答えは出ない。ならば、私はそのまま彼女の首に手を伸ばし、私がされた通りのことをすればいい。

抵抗もせず呻き声だけを上げる彼女。白目を剥き出しにしているも尚、美しさは衰えない彼女。さっさと死んでしまえ。もう二度と人に悪さなど出来ないようにしてやるから、早く、早く！

一気に力を込めた直後だ。気の枝が折れるような乾いた音が鳴った。

それと同時に、私はすべてが終わったのだと確信した。

もう、私は誰にも頼らないでも生きていける。そんな自信に満ち溢れている。相馬くんにだって、自分の想いを伝えてあげよう。私のことを護る必要もない、だから、ずっと一緒にいてくれさえすればいい、と。

彼は喜ぶだろうか。たぶん、少し辛そうな、そんな顔をするのだろう。優しいから、急に私が変わったことに異変を感じて、そんな顔をするのだろう。

でも彼は、私の言うことを聞いてくれるはずだ。

だから、ずっと傍にいたいことを誓わせよう。ずっと、ずっと、私たちが朽ち果てるまで。

#### 四

俺は今まで、何故彼を信じてきた。護符と人ならざる者に関すること以外、彼から得たものはないというのに、何故今の今まで彼を信用してきた。

すべてが彼の思惑通りだと、神崎の両親が殺されたその場に彼がいた時点で気付いても良いはずだ。むしろ気付くべきだったのだ。

漸く彼、鎚木の真意に気が付き、それを彼にぶつけたというのに、当の本人は小さな笑みを浮かべている。余裕の表情。俺がそれに気付いたからなんだというような、そんな顔をしている。

「まあ、そうだな。お前が言っていることは正解だ。だが、私にとっても予想外の展開になりつつある。本当ならこんなことは言いたくなかったんだが、仕方ないだろう」

一体何を言っているのだろうか。予想外の展開？ これまでも、そしてこれからも自分の描いたシナリオ通りに事が進むことが判っているかのような顔で、何故そんな言葉が出てくる。

「私に協力してくれ。この先、私には力が必要になる。お前と、神崎の力がな」

「な、何言ってるんだよ！ お前は俺を騙して来たんだ。今さらそんなこと頼まれて、はい、わかりましたなんていうと思ってるのか！」

「思っちゃいないさ。だが、慎治。お前は私に協力するしかない。否、話すべきか。すべてを」

思わず首を傾げてしまった。表情を変えようとしないう彼は、声だけで自分の感情を伝えてきている。そしてそれが、謝罪とか、そういうものの類であるということだけはわかった。

「私は夢魔を放ち、多くの死者が出るだけでよかった。この日馬市に放ったのは、お前らがこいつを討払うことができるかどうか試すためだ。そして当分の間、お前らに奴の力が及ばないために、お前の通う学校と家周辺に微弱な結界を張っておいた」

「じゃあ、何故あの自殺者が出たんだ」

「そこだ。結界が微弱とは言え、夢魔如きに破られるような、ましてやそれに憑依された人間が破るなんてことは不可能なはずだった。だがそれが破られた。これがどういうことか、お前にわかるか？」

なんとなくだが、わかる。それはつまり、鎚木の結界を破れるほどの力を持った何か、この近くに潜んでいるかもしれないということだ。しかし、それこそ有り得ない気がする。もしそれほどのや

つがいて、何故被害が出ていないのか。

ああ、つまりはこういうことか。

「結界を破ったものが、人ならざる者とは限らない？」

「ああ、たぶんその通りだろう。そしてそいつは、お前たちの身近な人間である可能性が高い。そういえば慎治、お前は何故私が神社に戻ってきていることがわかった？」

「え？ 何言ってるんだよ。俺が後輩と別れて横断歩道渡ってるときに声を掛けてきて気を失わせたのはあんただろう？」

そこで彼は、初めて表情を変えた。疑問。俺の言っていることが理解しきれないということだろう。それはつまり、彼はあの場になかったということだ。では、一体誰が？ 俺は何故神社にいた？

もしかしたら俺の意識を少しでも操っていたのは彼ではないかもしれない。神崎の両親、夢魔による自殺者。彼が起こしたことに便乗した誰かがいて、そいつは俺と神崎になにかを仕掛けようとしている。そんな可能性が出てきて、そして身近にいる人間の顔が浮かんだ。

まず俺と神崎をよく知っている人間でなければ、こんなことをしようとは思わないだろう。むしろ夢魔を滅することを考えるのが普通だと思う。

思案する俺に、彼が問いかけてきた。

「お前は、どこから意識がある」

「 境内で、声をかけられたところから、かな」

「そうか。なら教えておこう。お前は自分の足で神社までやってきて、そして賽銭箱の隣に腰かけたんだ。最初は私を見てもお前は驚きもしなかったがな」

自嘲交じりに言うそれを、信じていいのだろうか。

「じゃあ、俺はあんたに連れて来られたわけじゃないんだな？」

さっきも同じようなことを言ったぞと返され、そしてさらに続ける。

「おい、お前は私のところに来る前、後輩と会っていたんだな？  
恐らくだが、この不測の事態を招いたのは、そいつだ」

信じ難いことだ。彼女は神崎を慕っていた。それが何故このよう  
なことをする？ 動機は何だ。もしかしたらこれも鈴木が俺を騙そ  
うとしているのかもしれない。すべては彼女の仕業だと。

だが、彼も自分がしてきたことを認めた。それならこんなところ  
で嘘を吐く必要などあるのか。

俺が信じ切っていないことに気付いたのだろう。彼はああ、と考  
える素振りを見せて、言ってくれた。

「一つだけ言わせてもらおう。これまでのことを許せとは言わん。  
だが、これからのことは信じてくれ。このような事態に陥るなど考  
えてもいなかった。すべては私のミスだ。お前たちを覚醒させよう  
と急ぎ過ぎた結果がこれでは、話にもならん。だから、これからは  
信じてくれ」

自分勝手なそのもの言いを、俺は何故か信じてみようと思った。

## 五

「相馬、私がこれまでしようとしてきたことを、この件が終わった  
ら話そうと思う。そしてこれからは無理に力を引き出すのではなく、  
ゆっくりと時間を掛けてやることにする」

いきなりそう話しかけてきた鈴木に、俺は首を傾げてしまった。

「まあ、そうだろうな。私も自分で何を言っているのか。今までや  
ってきたことからすれば、私とはこれ以降関わりたくはないだろ」

そういうことじゃない。いつもと違う、どこかしおらしい彼を見  
るのが嫌なのだ。鈴木正臣という人間は、傲慢で、自信家で、周り  
を見ない。だが、彼の言うことのほとんどは正論で、こちらも返す  
言葉を失ってしまう。それが彼なのだ、俺はそう思っていたのに、  
なんだこれは。

「何なんだよ。アンタは自分がどんなに酷いことをしても、それで

も笑ってすつ飛ばすような男だと思つてたのに、それでもアンタは  
鎚木正臣かよ！」

何故俺は怒鳴っているのだろう。“味方”とは違う。そういう人  
じゃないのに、仲間なんてのも合わない、そんな彼に対して、何故  
本気で怒っているのだろう。俺は。

俺は、彼が俺の知っている彼でなくなることを恐れている？ き  
つとそうだ。だから俺は勝手に怒り、変わってしまうかもしれない  
鎚木に対して怒鳴り付けるのだ。

そんな俺の心の中を見透かしたように鎚木は笑みを浮かべ、勝手  
なことを言ってくれる、と呟いた。俺になんとか聞き取れるくらい  
の、呟きと取れる言葉を吐いた。

そうだ。俺は勝手なことを言っている。そしてそれは、鎚木自身  
もそうなのだと自分で認めているはずだ。だから先ほども小声であ  
んなことを言つたのだろう。少なくとも俺は、そう思っている。

「今は、違つかもしれない。だが私は、自分自身を鎚木正臣だと思  
い、信じている。だから、そうだな。これも私の一部なのだと思う  
てもらえればそれでいい」

ふざけている。何もかも。そう思つたときだ。鎚木が歩みを止め  
た。

「おい、慎治。止まれ」

「え？」

「何か、いるぞ」

そう言つてから、少し前の十字路を見ている。前方には何もいな  
い。つまり、左右どちらかから何かが来るということだろう。

「おい、隠れてないで出てきたらどうなんだ」

鎚木の言葉に、それは姿を現した。ゆっくりと、十字路の真中へ  
と歩み出してきたのは、二人の人物。俺が良く知っている人間。

「遅かつたね、先輩」

満面の笑みを向ける早乙女。そしてその隣には、無表情で虚ろな  
目をしている神崎がいる。どうみても神崎は普段と全然異なってい

る。これは、早乙女の何らかの力によるものだろうか。

「でもまさか、二人もいるとは思わなかったけど。先輩の隣の人、誰ですか？」

俺が答えようとするのを、鎬木が手で遮り、そして代わりに答える。

「こう言えばわかるだろう。夢魔の、前の飼い主だ」

「へえ、そうなんだ。つまり私がこんなことをするようになったのも、すべて貴方の仕業、ってことかしら？」

特に驚いた素振りも見せず、今度は鎬木だけを見据えて問いかける。

「まあ、簡単に言えばそうなるんだろうが、結局はお前が人ならざる者を手懐ける力を持っていることにも問題があるのではないかな？」

「あら、そんなことまでわかってるの。ってそりゃそうよね。人が飼っていたのを気付かれずに奪うなんて、そう簡単には出来ないらしいから」

「お前も自分の能力に関しては随分と詳しいんだな。だが、一つだけわかっていないことがあるだろう」

そこで初めて早乙女の表情が変わった。首を傾げて、わからないという風に言葉を出さずに伝えてきた。

「やはり、な。昔、日本ある地域では、人間は人ならざる者が見えるのと見えないのとで区別されていたことがある。そして前者は人ならざる者を排除するために、強力なそれを自分の中に封じ込め、その特殊な力を自由に行使できるように特殊な訓練のようなものを行わなければならない。

だがお前は違うだろう？ 元々そういうのが見えていたのかどうかは知らないが、人ならざる者の力を使うために必要なことは一切していないはずだ。幼いころはある程度の力があるために奴の力を自然に封じ込めていたが、これまで何もしてこなかったお前は抑え込む力を失い、自我を乗っ取られた。



恐らくそいつは先祖から代々伝わってきている奴なのだろうが、あれかな。お前は幼いころに両親を失い、遠い親戚の所まで飛ばされ、全く力などに関することは教わってこなかった。だから今、お前は自分の身体が、人ならざる者に支配されていることにも気付いていない。

ほら、本性を現せ」

その言葉に、早乙女は頬を吊り上げた。

「そうか。気付いていたか。だが、それがどうした。私の力さえあれば、貴様の中のやつらだって私の思いのままだ！ 貴様等にはどうすることもできないんだよ！」

人の顔とは思えない。悪魔。それが似つかわしいだろうその顔で叫んだ後、すぐに普段の早乙女の、天真爛漫とした笑顔で、神崎に語りかける。

「さあ先輩。あの相馬先輩に、自分の想い伝えちゃってくださいよ  
お」

甘えるような声。そしてそれに反応して、神崎が俺のほうに向かつて来る。

「ねえ、相馬くん。私ね、もう君に護ってもらわなくても大丈夫だよ？ さつき、自分でお化けみたいなやつつけられたんだから。だから、これからは私が護ってあげる。だから、ずっと一緒にいよう？ ずっとずっと、傍にいてあげる。相馬くんを一人にしておくとか危ないからとか、そういうのじゃないの。私は、相馬くんのが好きだから、言ってるの。だから、ずっと一緒にいようよ。ね？」

俺は一瞬、耳を疑った。それはいったいどういうことなのかと。顔は笑っているが、目に光のない彼女の言葉は本当なのか。本当に彼女一人で人ならざる者を倒したというのだろうか。そして彼女が言った、俺のことが好きという言葉。

嬉しくないはずがない。護る必要もなく、俺がそれを義務と感じなくともいいというのであれば、俺もそれに応えてあげたい。俺も君が好きだと、伝えたい。

だが、俺は鎬木に言われずともわかつてる。彼が俺に、これは罾だと伝えようとしているのもわかつてるから。

「君はまだ、夢魔を倒せてはいないよ。君は今、夢魔に乗っ取られているんだろ？」

隣で頷く鎬木が目に入る。俺は間違っていない。

「そう、君はそんなこと言うの。なら、もういらぬ。消してあげるわ」

すぐ目の前まで迫ってきた彼女は、俺の首を締めあげる。それに抵抗しようとしたところで、身体が縛りあげられるような感覚を受けた。

辛うじて動く頭を鎬木のほうに向けると、彼は真剣な表情で俺を見ている。右手の人差し指と中指が俺に向けられている。彼に特訓を受けているとき、俺が反撃しようとしたら毎回こうやって動きを封じられていたのを覚えている。

一体どういうことだ。

問いただそうにも、小さく開いている口はまったく動かず、呼吸をするのでやっとだった。否、その呼吸も難しい状況だ。何せ、神崎に首を締めあげられているのだから。

だんだんと意識が薄れていく。

俺は、死ぬのか？

嫌だ。たとえ彼女の手であっても、それが彼女の意味でもないのに殺されてたまるか。こんなところで、俺が死んだら一体誰が彼女を護るといふんだ。鎬木なんかには頼れない。こんな仕打ちをするような人間を、これ以上信用できるはずがない。

だがどうすればいい？

「汝、自らの死を恐れるか？」

その声は頭の中に直接入ってくるのがわかった。それも幾つもの声が重なって聞こえる。男とも女とも区別がつかない。

「汝、自らの死を退ける力を欲するか？」

この声がなんなのか。俺は知らない。だが、これは俺に力を与え

るためのものなのだ、自然とそう思うことができた。どちらにせよこのままでは死んでしまうのだ。それならば、これを信じてみる価値はある。

『ならば念じる。素戔嗚尊、招来』

素戔嗚尊、招来。

直後、俺の首にあつた痛みと、縛られている感覚がすべて消えた。神崎と鎬木の二人が、何かに撥ね飛ばされたかのように俺の傍から離れ、鎬木は空き地のフェンスに背中からぶつかり、神崎はコンクリートの地面に尻から落ちる形となった。それでも表情の変わらない神崎。鎬木は衝撃に顔を顰めている分、人間らしい。

しかし先に立ち直つたのは鎬木のほうだった。そういつた面では、彼もまた人間とはかけ離れた存在な気もするが、今はどうでもいい。「力が、覚醒したか」

鎬木の言葉に、早乙女が顔を顰める。

「貴様は何者だ？」

俺が何者だと？ 決まっている。俺は俺だ。相馬慎治、それ以外の何者でもない。

「俺は、」

言いかけて、言葉が喉に詰まる。俺は今、どんな姿をしている。そう思い、自分の腕を見してみる。

なんら変わらない。

「わからないのか？ なら、これを使って自分の姿をよく見てみる」  
そう言つて肩から提げたショルダーバックから、小さな手鏡を取り出してこちらに投げた。

それに何らかの仕掛けがあるとか、そんなことは疑わずに、自分の顔を見してみる。そして漸く気付いた。自分の変化に。全体的な変化じゃない。ほんの一部。

髪の毛が一房ほど金色に、瞳が赤く染まっている。

「なんだ、これは……」

「うるたえるな慎治！ 大丈夫だ。そんなことを気にしている余裕

があるなら、前の敵を見据える！」

鏑木の怒鳴り声。初めて聞いたそれに、俺はどうしたらいいのかわからなくなってしまう。彼自身、動揺している。それがわかるから、俺は、何もできなくなってしまう。

否、ここにいるのは全員敵、か。俺は神崎を助けることだけを考えればいい。しかし鏑木は、恐らく力の覚醒のために俺を縛り付けた。そう、俺の中の何かが言っている。

どのみち、三人も同時に相手にするなんてできるはずがない。そもそも俺にどんな力があるのか、今一つ理解できていないのだ。

素戔嗚尊。

聞いたことはある。日本の神話に出てくる神様の一人のはずだ。

そしてその中で八岐大蛇ヤマタノオロチを倒したのも彼のはずだ。しかしそれが何故俺の中にある。神話、つまり作り話の世界だ。

訳がわからない。

「おい、こう言う諺があるだろう。火のないところに煙は立たない」  
何故鏑木は、俺の心の中が読めているかのような言動をとれるのだろう。とりあえずこのことは後で聞くとして、つまり素戔嗚尊は実在して、八岐大蛇を倒した、ということがいいのだろうか。

なら話は早い。俺には武器があるはずだ。先ほど鏑木と神崎を吹っ飛ばしたときと同じように、念じれば出てくるだろうか。

アメノムラクモノツルギ  
天叢雲剣、招来。

すると、また何か衝撃波のようなものが俺の身体から発せられた。しかしそれだけで、後は何も起こらない。

「なんだ、何もしないのか。なら、貴様から殺してやるよ。さすがにもう、この女は役に立ちそうにないからな。私自身の手で、楽に死なせてやる」

「おい、何をしている！ さっさと力を示せ。お前の中にいる奴の力を、敵にぶつけるのだ！」

何かごちゃごちゃと、五月蠅い。こっちは訳がわからないっていうのに、何だ。何故出てこない。何も起こらない。

「くそ！ 念じて駄目なら、口に出したらどうだ！」

「はっ！ 何をする気か知らないけど、無駄だよ！ 何をしようとして私には通用しない。私に敵なんかいないんだよ！」

もうやけくそだった。走り迫る早乙女に、何かされる前に結果を出せなければそこで終わりなのだ。力を欲するか、などと聞いてきた奴は、今や何も語りかけてはこない。そんな奴の言葉を待っていない、死んでしまう。

「天叢雲剣よ！ 我が手に力を！」

ちよつと待て。俺が言おうとしていたことは少し違つぞ。

そう思つた次の瞬間、早乙女の胸に青白く光る剣が突き刺さり、それは彼女の身体を貫き通して、剣先が彼女の背に見える。

彼女が動かなくなるまでに時間はかからなかった。そしてすぐに剣は消えてなくなつてしまつた。俺が彼女を刺したという事実以外、何もわからないまま、俺は意識が遠のくのを感じた。

## 六

周りが白く、何も見えない。自分の手足さえも見る事ができない空間に、俺は一人立っている。

否、立っているかどうかもわからない。そういう感覚もまったくないのだ。自分の微かな息遣いだけが聞こえる。そして目を開けて前だけを見ている。それだけはわかる。そう、それだけ。ここがどこで、神崎たちは一体どうなつたのか。俺自身も、どうなつてしまつたのか。

どうしたらいいのかわからず、途方に暮れるしかなかった。

どれだけの時間が経つただろうか。何もないこの空間で、時間の感覚さえもわからない。もう何時間も経つた気がするし、でももしかしたらまだ十分も経っていないかもしれない。このままでは気が狂つてしまいそうで、怖くなってくる。

「主よ」

その声はいきなり語りかけてきた。神崎に首を絞められ、鎬木に縛り付けられていたときに聞こえた声。しかし今は、もつとクリアに聞こえる。声の主は、すぐ近くにいます。だが姿は見えない。

「吾が名は素戔嗚尊。吾は汝を、吾が声に答えし新たな主と認めよう」

「どういう、ことだ？」

息が苦しい。先ほどのような、首を絞められているとは違う、また別の感覚だったが、それでも苦しいことには違いない。早く、こんな場所からは逃げ出したい気分だ。

「さあ、今一度、吾が名を唱えよ。そして吾が兄弟を探し出し、共に邪なる魂を浄化せよ」

俺の問いに答える気はない、ということか。しかし俺には力が必要だ。これからも、神崎を護って行くために。そのために、素戔嗚尊の力というものは必要になってくるはずだ。そして今、この声は自分の兄弟を探し、邪なる魂を浄化せよと言った。それはつまり、他にも今は亡き神を内に宿した人間がいて、彼らとともに人ならざる者を倒せということだろう。

これは神崎を護ることにもつながらざるはずだ。なら、迷いなど必要ない。

「素戔嗚尊！」

直後、眩い光が発せられ、俺は無意識に手で目を覆った。

「……まくん」

誰かが何か言っている。誰だろう。

そうだ、目を開けよう。そうすればわかるはずだ。声はすぐ近くから聞こえたのだから。

「相馬くん」

俺と神崎は目が合い、彼女が俺の名前を呟いた。

「良かった。起きてくれた」

今にも泣きそうな顔で、しかし無理に笑おうと笑顔を作ろうとし

ているのがわかる。夢魔に侵されていたはずなのに、今の彼女はいつもどおりのそれとまったく変わらない。俺の好きな、とても大事な人だ。

「ごめん、ね。私のせいで、こんな目に遭わせちゃって。本当に、ごめん」

嗚咽交じりで、しかしそれでもまだ泣くまいと、必死に涙を堪えている。俺の前で泣かない。そうすることで、自分の弱さを隠そうとしている。それが、今の俺には、余計につらくて、だから、つい口に出してしまった。

「泣きたいなら、泣きそうなら泣いていい。でも、これは君のせいじゃない。悪いのはすべて、早乙女さんの中にいたやつがいけないんだ」

実際は違う。鍋木も今回の件に関わっている。

辺りを見回して、ここが自分の部屋ではなく、神崎の部屋だと気付く。以前来たとき、女の子らしい部屋だと思ったこの部屋。初めて夢魔の存在に気付いた場所でもある。そして先ほど、素戔嗚尊から力を託された場所、ということにもなるのだろうか。

そう思いながら、神崎の頭に手を乗せて、ポンと軽く叩いて見せた。するとそれだけで、堰を切ったように透明の雫がポタポタと零れ出した。思い切り泣いてくれればいいのに、俺がそう言わないからなのか、彼女は声を押し殺して、顔をクシャクシャにして泣き出した。

夢魔と対峙し、身体を乗っ取られ、俺を殺そうとして、そしてさつきまで俺は気を失っていて、きつと乗っ取られている間も、意識自体はあったのだろうか。だから、こんなに泣いている。

彼女は強くなかない。普通の女の子だ。

身体を起こし、そつと彼女の身体を抱き寄せる。抵抗はない。それどころか、彼女も俺の背中に手を回し、しがみ付いて来る。

そして俺は、再び誓う。

「俺は、君を護る。どんな奴からも、君を、永遠に護り続けてみせ

る」

七

一週間。

久坂高校で起きた自殺者について調べ始めてから、まだそれだけしか経っていない。つまりそれだけの時間で、この事件を解決してしまったことになる。早乙女の中にいた者と、鍋木が放った夢魔。偶然が重なったことによって神崎が危険な目に遭い、そして俺もまた内なる存在に気付いた。

家に帰ったあとそれについて葉月に聞いてみた。すると彼女は、つまらなそうな顔をして、

「なんでそっちに気付いて私のことはまだ思い出さないのよー」と不貞腐れてしまった。

しかし夢魔のいなくなつた今、彼女は元いた場所、つまり神崎の中に戻ればいいと思うのだが、何故か俺の部屋に居座っている。正直言つて、小さいからと言つて、幼いわけではない彼女をずっとこの場所に置いておくのは気が滅入る。

そもそも彼女は、俺を男として見てないのかもしれない。単なる宿主のようなものだろう。本来の宿主は神崎だが、もしかしたら彼女はここが気に入つたのかもしれない。どうせここからでも神崎を見ていられる。俺と神崎はほとんどの場合一緒にいるし、これからはもつと増えると思う。

しかし早乙女が生きていることを知つたときは驚いた。そもそも俺が刺した剣は、肉体は断ち切れないものらしい。これは鍋木の推測でしかないが、天叢雲剣は人ならざる者を斬るための武器であつて、人体に影響を及ぼすようなことは無い、ということだ。早乙女に使つた結果からそう推測できるといっただけで、確証はできないらしいが、大凡これは信用してもいいだろう。

もし他にも何かあつたところで、次に使う機会がない限りはわか



らないのだ。それならそれまで放っておけばいい。

このまま何も起こらなければいい。素戔嗚尊スサノオの言葉からして、何も起こらないわけではないのだろっけれど、それでも夏休みが終わるまではのんびりと過ごすのもいいと思う。

このとき、俺は初めて夏休みもいいと思うことが出来た。

## エピソード

### エピソード

始業式の朝、校門の前で新聞部の三人がせつせと『週刊草高』の増刊号を配っている。

俺は神崎からそれを一部受け取り、歩きながらそれを開いた。すると一面一杯に自殺の件について書かれている。

『まずは謝罪させていただきます。今回の自殺の調査をしていると、社会の黒い部分が見えてきて、こちらに関してはちよつとした規制などがかったため読者にお伝えできない。それが残念でしかなく思い、このことをお詫び申し上げます』

これは恐らく、辞めさせられた教師や生徒の件だろう。

『信じ難い話だが、今回の自殺には目に見えない者の力が関与していた。それを教えてくれたのは、日馬神社の神主である鍋木正臣氏だ。彼の話では自殺した生徒の中には、人を自殺に追い込む悪霊が取り憑いていて、日馬市で起きる自殺者のほとんどがこれの被害者だという。彼もこれの調査をしていて、今回の一件で次に取り憑かれた人を我々報道部とともに探し出し、これを鍋木正臣氏が持つ素戔鳴尊という神の力によって除霊した』

大分脚色されているが、事実とほとんど変わらない。そしてこの話を信じる生徒などほとんどいないだろう。それが一番だ。誰もが事実を知り、しかしすぐに忘れ去る。

そうしてすべてはなかったことになる。

これからもきつと、同じようなことが続く。そして同じように皆が事実に関心、忘れていく。

そう思いながら、次のページを見る。読者コーナーや早乙女と相沢による学校七不思議体験談、新聞部顧問からのお知らせなど、とありあえずすべて目を通してみる。

自分の席に着いたころには最後のページを見ていて、そこには新聞部部长手記が書かれていた。

『今回はたくさんの人に迷惑をかけてしまいました。それがとても情けなくて、悔しかった。けれどそんなときは思い切り泣いていいと言ってくれる人がいてくれて、とても助かりました。』

彼のおかげで、今回の増刊号の発行も問題なく行うことができました。彼には感謝の気持ちで胸がいっぱいです。

本当にありがとうございます。もしまた、私たち新聞部が困っているときは、助けてくださいね。』

俺は最後の文を見て、軽く嘔き出しそうになった。まさかこんな形でお願いされるとは思ってもみなかった。しかも私ではなく、私たち新聞部、というのだから困ったものだ。本来俺は、彼女さえも護ればそれでいいのだ。

だが彼女はそれが嫌なのだろう。自分だけでなく、自分の周りも見て欲しい。彼女らしいと思う。

そして彼女がそういうのであれば、俺はその思いに応えなければならぬ。

まだ始業ベルの鳴らない教室から、外でせつせと動き回る神崎を見て、頑張れ、と呟いた。

## エピローグ（後書き）

これにて夢魔編完結です！

しばらく空けていてすいませんでした。その代わりというわけではないですが、一気に完結まで持ってきました。

ですが、「二人の誓い」はまだ続きます。

次回のキーワードは三貴神と百の手、です。

ではまたお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3281c/>

---

二人の誓い

2010年10月8日15時38分発行